岷江入楚

乙女

乙女

卅二歳　諒闇　任太政大臣

四月一日　更衣改凶服事

槿斎院除服事　源氏訪給

大殿若君御元服之事　夕霧大将是也

六位還殿上事

冠者君付字事　於東有此事

入学事　寮試事　文人擬生事

梅壺女御立后事

源氏立后連續事

源氏任太上大臣事

大将任内大臣事

冠者君与内大臣四ノ君腹姫君比々奈遊ホ事　雲井乃君

内大臣殿依姫君事怨大宮給事　姫君十四ゝゝ

姫君奉渡内大臣給事

五節事

惟光良清女為五節事
冠者君聴旦衣参内事
源氏遣文於筑紫五節事
冠者君書文於惟光女五節事
花散里君為冠者君之御後見事

廿三歳　太政太臣

正月大政大臣覧青馬事　（忠仁公例〻）
二月朱雀院行幸事　（三月女院崩御忌月故也）
於御前文章生試事
於栖殿太后御対面事
大学君補進士事
同秋除目任侍従事
六條院造作事　（六条京極中宮旧故宅辺四町也〻〻）

廿四歳

春式部卿五十御賀事
八月六条院造畢御方々移従事
　花散里　艮町　紫上　巽町　中宮　坤町
九月秋好中宮献紅葉於紫上事
紫上御返事付五葉松事
十月明石上渡六條院事　乾町

乙女

詞并歌為巻名

源氏歌ニ

乙女子も神さひぬらし天津袖ふるき世の友よはひへぬれは

日初ニ

せうしやうとのゝうちゝしをとめしいたりし女のもとへおほしいてゝ

式部卿乃宮の御事なと

河 凡此巻文節集昨為宗以之此名

秘 巻名詞并歌号之五節のまひ姫を号るとみえたり

源年廿一乃冬月より廿二乃十月まての事みえたり　花同

妥 源廿二より冬より　三とせかはりて十二より十月まて

廿二年秋まてし

私云十月まてといつるよし

としかはりて宮の御はてもすきぬれは　諒闇乃事なるへし

河 藤壺女院一周忌也

花 去年三月藤壺かくれ給ひしかは三月周忌也河ハ誤れる也　妥同

秘 藤壺は諒闇三月まてなり　只今諒闇并ニ月の事なる也

世中色あらたまりて衣かへのほとなと

河 除服のよし　除服をぬきかはるといふ也

花 天下皆諒闇の服を脱し也又正月只衣の頃ハ若菜をも

まして祭のころは

大かたの空のけしきも

花 四月ハ清和乃天気と云也

妥 諒闇の後世中ハ今ひときはいろめかし

秘 四月天気和又清といへり

前斎院はつれつれと　年ハおりかへりなとといへり

妥 前斎院ハ式部卿宮のむすめ朝顔乃君也

おまへなるかつらの下風

秘 斎院はまへなるかつらを挿頭の座にさす桂也

大殿よりみそきの日ハ

秘 此斎院御禊見物の日也

妥 斎院御禊乃日也　妥 同午日也ここ

なりけるを　祕 みな乃詞是より奇へかゝりてなる詞也
花 こゝのなりまでハ上にかゝりて 匡ニ源氏の心みな詞也 下ノ奇にかゝるを
なる詞也 こゝの心様の日まてハ薫思の心様にあらせすに
廻らしそもいひしらけりしとのんてと
私ニ本にハ字をとりけるニ式部の月須まゝすてもなへはけるに
けさや宇治川かけ乃ほてなうり右かみを見のなれ屋つまこを
祕 云ひをほゝるとし 是もまてハ無思なりしといひつゝを
もゆかりなりけるとし 右かのんをこまとハ陰陽の日の様のなし
いつかゝ無思とりませすて陰陽のみんをこきあらんをハそく
さりしこと後を聞かよせてり此もの後にあまりこ事なと
花 かまをやはしハいひけさやうし云詞也 あちれ屋つまこハ後哀
とりなれとけ乃関よまきへくいてり後と何乃関かける八
式部佩みて宇ちに身をかけつ廻し 中し式部をそむのたつく
アまとちすくてみよ とゝこ右かのれを見て無思の心様の
弄 右かのんそ記しは陰陽の日の様のなし いつ一日無思よりませ
なりて陰陽のこゝそこまあるへせといひをきりしとく

或又説式奇陰陽のなをハえて須まゝまてハかゝのこゝをなり
まけりとこそハ川ろてかをやみてあまさと常式のへくさとい道
云ハさやて云心とまをゆやてとあそなれし今ゝ陰陽をハここえ
はそこにハみのとうれなふてとわれまうてんてるて陰陽とハ名も
私式説陣書くも記まる以下以前を月下前の前てしる陰
陽の九々をおもあふて云ふそてあつれ去日の日にまてハ心様よ
まさまりかて年ハ後れ屋つまこをあらくみみんのかにこそき
と云あうへもまて心様のみそまたといひよせつゝ奇
祕 後のむす付るハ後哀に縁あり
花 武蔵乃紙に書ハ後に付るなし 後ハ又後哀にゆえへてなし 奇
武蔵乃こものなて　祕 何ゆへと其時は盛なりてなし
安大子ハ源のみかとにとてむつましくえんしの是ハあくれるる
おりれあくれなり是ハ
まつてなれんに人人のなし
近権亦説 おとし哀こさしハこれの中にてみまれにりにゆきみを見のよくわける世源
此なり 花なる所の関みもはへぬこまか所て世ふうりゆを上なそのみへける
花 前のやつまこていよしといひうれハゆやーかつりれ給て陰陽し

秘
院之世にふる世ハ古きこの玄の花ゟ何とか云はむと給ふを云り
御乃衣をと云り
斎院ハ服にてこそ　月日のゆくもかくうつりて花のあはれなる事ならて此ことハ
或書花云式部卿ハ斎院の御服にてさふらひ給ふより月頃を云て
去年の別れのかなしみにくらへて見そこなひ給ふに見るかなしさと云
今年やまたのなけきにそへて八年忌にまてまさしくあはれ其後又宮に給ふ
まさのへ式部卿宮ハ桃園の宮にこそまかりへしと云り
秘式部卿も九月に入て御法事ありて藤壺なとかや
一年なりけれは斎院のおしあはれと式部卿の宮ハ御
同年を後のゆかしき只哀なることにて此たひ宮のまた又
かかる桃園の比まかりぬるといへる又内侍のすけや
さるへきことなり　秘云の中にいふことにて紅梅にありハ寺
式部卿薨して寺と云也　実に同し式部卿にてもとより
御かとしかく　源氏し
桃園の御門の　秘　又宮の斎院とめさるへく云
服と調して源よりもの陀をのこて

ひとへなるしれとれ　秘院とに女宮之御とけ出給はん
源乃はしたるめりのやうを女宮そはかしく思ひて
まして女御の御法事にて　風流めきたる御文をのそひ
うちはへしるしくて　かしはてさまあきてとも
とも陀をおかりや宰相の御もて　秘女宮はまかしへし時も
るぞ出すハ常陸宮ありしと宮たちおほかれし
女五乃宮ありけりて　女五宮へもうしやうことのつひ
まうけと聞ひのほとく源をあはれとの御網
おほれひとくとのつひのふりしかりともかへして
まつさしくへいりつひ　秘東宮の御志ありて給ふもとして人と覚ふ　源と将しかる絶
私源のよしおとなしくおほくみ御つかさのやうふおもとも
なとの給ふ源と内文に筆給と能るのるとふと上の毛
この院てあいはしけ　宮女五宮院乃御方にて源乃内侍と宮ふ
秘女五の宮は御親なの時そうく世訓しをのて
なとふくいまたしめつる　式部々文乃声に声にて東院まて
まり給ひとは本意とて　とひのかはりしかし

私源の心にはいひよりたまふにてあらはにはと云ふや
あなかしこもちてはかなきことにもの思ひそへ　弄 朝顔の御心なりとも宮との
秘 源とよろこびけむかしあるとなかれしかるよふにおもひをかきて
花 まちつけたまへとは他事にならてまことに別はたまるなり
みなかくれぬとは源氏とまりの年としたるのみ
私 系図乃御法にかやうなれり
ことはりもしたまふと　式部の文には源と年に加えんとしてみえし
あはれなりけりこそなかれ　桐壺の紅は月色を付しかりしと
くやしく年にえかへりけり　式部の文後悔ふかきしと女五の様人
此わかのみなり
さればこそ大臣乃娘云　葵上と
三文のおもひのあらん　秘 葵上は母文女五の姉也
式部は文をさしやうに宮ひつまてと三文の心をたとりて書ハ
ことはりとも云へさうらしと
之さうぬまゝおもはぬをきつれし人　秘 葵上ならひ
さやうにおほくかたをせまうしも

源よりきこえらるゝをは似合ぬよしいふ也となかりけれし
さうらくつてかく　桐壺はしのはすに文をかへりてし　弄
秘 朝顔はかゝる源氏又宮にひまつくしのみなし
此も葉のかゝはれ　はべし
んはさきなかりし心也　秘 桐壺乃御心也
このみて志ら心にこゝろへて　朝顔ノ詞也　又宮をさしやうにお
かしさうらハ今さらそれんとあらしもなし也
立つけなか　朝顔乃御心深くおもひまつる年に宮ひか
五の宮　女五宮乃さるまでもえ乃あらぬ也
おもひけりなきかなく　えるひ志らぬ也　その心ハをさまやと
うやくも　さてもなり
いとうしろめたく乃心　朝顔の御心也
文人は皆源の御心のあはれはいかなることろ志いてんと朝顔のいかやう
くはれそへなり
その所にこうつ　秘 源也　弄 源ノ心也

わうんを流さし　もとより源の人にてひめのふりまし
御んをうきこそしんなれはおかさ流るへし
秘　これまて京の作り事といへり
無品の法んをやかうてとしなからむことなとはせしめて
源氏光君も権乃ために源氏臣下になる
源てかくのひのうへそれと権の神になりて家人となり
いまていひやうにもなくてつくり事也　おかさ
流るへしとは源の人をとなふして下る也
大臣の子乃とくに　秘　光よりは夕霧のをうし
御きんなれとも　秘　夕霧十二歳のとき　弁
河　夕霧十二歳　十二元服あり　桐壺巻ニ註之
大臣はいとゆゆしきに　秘　夕霧の祖母
かの宮よりて　秘　二条宮也
右大将なとをへし也　秘　三条摂政是也　弁
後の頭中将ととこに中にまた夕霧乃伯父也
御おちはなやかなる人なれ也　右大将乃和哥大納言云

其文は末の史なりし系図にみえたり
に従ふあしとんとおもし　凡そて従に　一本　兼紀よとり
花　親王は子ハ元服の後にして従に従下に叙せし源氏の一世の常は源氏
は初同第にあらは親王の子に准して従に叙し給へん
とさふのゝわれとも代変あるへし
秘　一世は源氏を直に従に従下に叙せらる　夕霧は二世乃源氏なれは
五位に叙せらるへきなれとも　夕霧は八世の様にをしなさるゝ仰せられて宮
てに従ふあらぬへきとせられんにておほゆへきなり
孫王直叙四位立之上古之定也是續日本紀ホ不遑奥録
河　選叙令曰凡蔭皇親王子従四位下　注　親王者不限有品無品皆是一郎　内令称親王不注品階皆依如例
源興基　弾正尹人康親王男　貞観八年正月七日叙従四位下　無位
源博雅　兵部卿克明親王　承平四年正月七日叙従四位下　無位
親王子直叙四位雖為流例一世源氏大臣息大略叙爵元源
源叶　信大臣子　同静　光大臣子　伊海　兼明親王之子　忠賢　高明大臣子　皆是叙
従五位下者也　六条院于時大臣也　如何因茲四位になし

てんしとよりくとて　他之註砂在
或御説四位になさるへきを註砂にて六位になし給ふ是ハ大学の
道に入せんため也平人ハ七位なれとも六位へのほりて大学に入る
小人をも六位をさつけて六位にて大学に入せ給ふ源氏の御心深き事
元服後叙四品例　兼和良親王加冠叙四品同二年正通
三加冠郎叙四品源融朝臣於内裏加冠叙正四位下
きひしき　　雅イトキナキ也　日本紀
よう心をゆるし世をもちて　源のしつりしをおもはしかへり
あつゆくしてなりしんしも　秘 不意とおもひかけりもなくと
わさとなして殿上にのほりゆに　河 浅葱ハ六位緑袍童殿上以後還昇と
秘 あさきなる六位の袍といへり殿上にて人にはこそうハ童殿上にて
童殿上して昇殿せさするを申すハ殿にてそのわりなくといへり 河内
一世源氏の子ハ二世蔭従五位下なれハあけ衣の袍ときて昇殿せん
これ冠せしところあさきを蔭なる二世乃そ五位の蔭なりといへ共
いまさく叙爵と御心にて六位へ追(喜)従したる事式にて六位を浅葱とみ
えたり殿上にあさきにてのほりしといへり六位ハ浅き袍と云一説也

相違なき事ありぬ一説云六位乃ことくなる袍と浅葱といへり
深緑の名を藍と称す也浅き浅葱の名にかよひたる名なり
これによりて六条の上乃名のみのことく叙するに六位にてせしかは六条の
斎なとはあさきなりとやいひけん へきと 河内ハ六位の袍にて
還昇せりといふへきにや
御かういなんとて　大宮源氏に対面しまふてあり
式部卿こなたにて　六位にて昇殿の心ゆかぬ由大宮の御心也
をひつかれましう　河 加階をもとめしてとく進ませ給へときこゆ　新抄説
或説云若き人ハいまより老をおもほしをくへし　是河海説
秘 昇進をまつ人の道つきたる説へし　舟
私説にうたかふ河海にしみもまた昇進しはへらす源親
大学乃道を志さしあらハさん乃　花 西三條右大臣良相
公開院右大臣冬嗣公之子也大臣息大学之道をあらはせし
ありし例にかよひし河海にみえたり
河 尚書大傳曰古帝王必立大学小学使公卿之太子大夫之元
子士之適子十有三始入小学見小節焉践小義焉十有五年

入大学見大節焉踐大義焉入小学知父子之道長幼之序入
大学知君臣之義上下之位　論語曰三年学不至於穀不可得
而已　實録曰大臣在童雅居量開明及於弱冠始学大学
雅有才弁　貞観格曰大学者尚才之処養賢之地也天下
之後咸来海内之英並等游夏之徒也非公相之子揚馬之輩
出自寒素之門高才未必貴種々々未必高才且夫王者用人是
貴朝為厮養夕登公卿
松　礼学記玉不琢不成器人不学不知道是故古之王者建国君
民教学為先云々雖有嘉肴弗食不知其旨雖有至道弗学不知
其善　大学 鄭氏注云 大学者以記其博学以可以為政也
丞相之子息大学之道入吏良相公後賢々木之例有り　或
御説藤氏ハ勧学院 源氏ハ奨学院 橘氏ハ学館院 なとしるせりとあるを
て其氏々の儒者にまなふへし
いま二三年（フタトセミトセ）
いまひとゝせかりあらん　其心にてたのもしきまふけなる
しつくハ九重にちらん　源氏自称し

相みつのたえたえ花前あれし
よろしからむ花前なり
みなしこなるゆへよりたゝ人にゆかしくならん
松　延喜の帝よりあひとらふをなしてはしたなくなしたまへきにしたかふ猶
發花さし イ花　英文なり
みさし
あるまゝもかまひこにみえて学のうちなるとてこのむをまもりて
されはあやにかしこき院子のまさるなめり
松　学ありて君まつりことをよくしつるとや　弁
花　子なりしことさまたけし いとけなくて親王になさせ給ひける八宮
おもひなしにハ大臣のなかに兼の君ハ習聴（コツウ）といふ志をあはれなむ
又見遺於師職師平徳といへり　子ハ是其由なり
松　源のうしこれ延喜の帝より何も位へあるさへ君なれはうち
して大学のうちに入ましてまなふにハ公卿になりぬへき
ろうかんとみえて
つき川を通て世のゆくへのゆくさき
まさにみちをたゝしてゆくへにむかふ　懸隔
みちをゆくなり

くらゐ高く家柄にむまれて 世のおぼえ侍らず
なかなれば末の世の家もおとろへまさりて学の道をたちて
しもる人へあなつらるゝ 苦しからぬ事をあまたして
時うつりて世人の心もうつりてたのもしきところなき
にたのもしきところなくて 或ハ日まもり 駒(メグラス) 史記項羽本紀
さるゝ人もあるへしとおもひて なとかくもあらむ よしなき世の中
なりてさしはなちたるなとあらむ
案 ちかくよりてみるもの心をもとめて見るこゝちせん 所に通
ひたりける人へさし人のよろしきも見えさせける
時代のおほえ権威なとなくなりにけれは ゆかしきもちひられぬ
ましとものをおもふ人の進従せしも威をうしなひて そのよ
しをなけきさひしき人へ今おもひしられてなけきかなしむへき
なかれとたゝしきをかくして
やうやうにたのもしき人
花 とりもいかにもあはれ 魂 和名魂魄也
所々にうつりてハ 叙爵なとして へさき
秘 茵時なとにうつりてハ 叙爵なとしてへさると

いつの世にかありけん 六位までハ不定なれはなれとも後栄をみるにゆく
さきの源の初に
はかなき世のことわりにて 夕霧方のほうし 伊予介 道補 位乃比に
なさんとおもひしに 下りなりにけり
待らんなかなか源氏の後をうしろやすくおもひなりにし人へ 句
秘 源の麓をわけて後にうつりゆくへきこと 秘 御子に源氏の紫
是にてあるへし
かくて今ハさるへきたよりなくて 人をちからにせまらせつゝ
大学の君にとりてもしのひあはれなる人も
に窮セニル途 急セニル 日本記 窮者 同上 薦 むくらウスキ紙アリ
とりわけ学にてせまりける大学の君なりしといへり
花 せまりしハ窮者也 除目乃に江の籍に門置窮者と云事アリ
さしもハ大学の君のすゑにて 年ごとにすゝみて除目なとにて
秘 世にありける大学の君なれハ 窮者にて たひたひのかなしみとなりける
いつくも学のかたくなりて あはれなる人
うちあはれにも
秘 大学の一覧也

隠しけれとも思ふさまへしかきけりかし
きんたちも
此大将なとも
いかならんかし　あまり人のおもひおとしぬへきなく
この君たちなんかう　夕霧元服中也大宮の宮にへし
大殿の御せつにても有て　抄 大殿の御子は大将と別後の事也
系図にも葵大納言夫人あまた二人の内此大殿の御子也
何されといふかくしかし　六位のうへは大学の作詞也
しらつつひかひらく　抄 源氏也
いかにとよりて侍るとも　見より源の詞也
おほけなくまつかうまつるも先宮にて相ひ人なれなきまてものほと
世人の知らぬなく
て夕霧元服を思ひまつりしかしもあさ侍る　抄 夕霧此る事をのかなへ名にてこそ言ひ
くりんなしてまへつおほしれ侍らは　源ノ詞也 学文を
ておほしなりと思ひうつるは其の後しは自然に持らんへつくれと也
あさる流へるうへは心人りし時にて　弁二条ノ東院にて
抄 字之儒者に頼とて心をえて侍りし　文章院まで堂監と云ふ

字をつくる事付る也　文屋康秀を古今序に文琳と書るゝ也
此類の名は抄にかきしつかへしぬ
河 礼記云已冠而字之成人之道也　字所以相尊也　今案六位冠
者其姓字呉口二橋宣原栄下曹司嘆也　水原抄云假令菅
原をとて大堂乃字をとせむとて文章院之堂監と申者の書くて
まかる侍し是は当時も御院の物衆の時前書学生力入学名
以前ツ是秀才随身ノ系図時堂監書下分名下也漢家にも侍
ヤツニ木朝にも假令由志たといつる名字は達青是躰に侍近代其
儀も後侍り登省ノ時ノ時必字ツツケ侍ル了
花 学生入学此時文章院ノ堂監カ定れ名簿に字をかくし 殿上扇
の作字は菅三江三ノ清行ヵ何まかは三耀といへり 夕霧乃何
さるとも源乃おほしてかへさまと

めつらしくけちかし記　めつらしきこと儀をゆふしくとみえ
いかしきは不審なるなし
さうせさせ中く松うしぬ本し　河 博士聴也

秘
そのかみなく　源の中将なりしとて にほひを起てたく
うるはしかりけるを清らのもとにむかへて匂ひを下にかよはす
ありくきとしまれ　たゞ　の人　のもとへまかりては　くまもなく
家ゆかりにいつしかあはれなりけるとやみてのちもいかにとおもひしき
弄
僊衣也　秘
窮しくあれ　伝にてとは始の伝によるを也
私　伝ふ秘蔵として伝ふる所はすくれたるにや只伝なりて候いける
弄
かなしみ　一本　花人あるしある紫末なれはあそびにと
いひつる事のかなしき一本にかうるかなさしてたちなれとやうもありけるなり
河
化市より求出する紫末とりてあそこさとは古の第の花の宿也
破製しぬへきさしいよくして　伊勢物語の花にてとかりたり
あそひ人乃おぬをあそひていふつよしとをもきらんさしいにつかれ
いさらいふなにをさてありしはさりたれは人乃せぬのかけてとも
なりけりせんかしこかくておもてなしあるさうなりこの所におさと
られて　一説くしかしこさ事とありて似たる
ゆ書
理字也　物に理運なるへし
むくしう
さはそあらしひたさしも御しくまさりけり

秘
まくしいとしめらうくある人といひつり
秘
道いしかとて　酌なとしかし　執子要道りしまて砂
をとろ思ひ池なとして水のみを代るも今を執りて節会の時は兎と
またまふれ別の土化もうはらい　むまは時に花いはさとなりはぬるに在り
私式義なる砂あるは　元年にとうしくあそひまうき
をえりもの世ふかくいみあまりてたしかにやはりそれとも
ちかてなるといふなり

右大将なとの私にれしくかりけるにかなるに
秘
あふなくかはれて同初也　伊勢物語の後にあふなくといふは
乃古いとかれくはまて会昧の心を其の会昧の心とはみえれは伊勢
物の方の言はたてならむ花まおあるもしかの字偏て意をとなり
此あなふかなるにはあなかすれんとみえくして
をちつけりある心たるとそ
河　とうらおほしは先號の先例に起るともあれ　弄　新ん此なな例
こうれいてし
とく　文代まる由もとらんとそ意をうしとられて　巡流し
私　河の流さてかもしとはあまて待まてれめあとはなとさとなり

とよとをとりこきてあるさ綱て
きかしらいりやとあらしをなりてひさうふ付りれが母
花 別ふ志るれ⌒し　御神楽と略也
本 早歌ノ詞也　塩ドノ急なとと云るを大食なとといふ人ハ拍子なとの
人のよしならぬなとしるし人のむかしを云はなきを云へり ハ定ア之 これ
よかるかに大宮の前なしぬ云てひ㐧ゝなりと云也 在ふ共なる
人ゝ塩下とは云也 人数の事を急しに有て
秘 此早十ケ条ノ一つ ちりしにれ八宮也 おうかとれしと早下
志てよしらいりとあらしとハ塩下此人ゝとも 大宮なとふて
塩下此云て下とてせし夜ふそて作しさこ御うるる人数の秘
と云しかく此下ノ傳なきの中に大将なとのより季すへ伺なり八
己かなるりとしかんなや　秘 此常に付りのなむ
ひさうしに作りなう母
うちうら此志るしみしさなふりしと
秘 大宮の此前乃詞也 うやふしてれ志なとて 志ゆれしてとふや宗
あつうし御つるせのそつなそこ御ろるるふなるよりしとなし

本 大宮の此前乃詞也　一儀しらの大宮の此前ふ大将尾アとよて
此むしらいりやこ乃あるしまてうりけとりのみをる河の
ましことと云也志られてとハ大宮の程とを志るそて河う
し志ののふつるもの也　一儀し志るしとゆるとハ大将のす
此云やと志らそハ大宮けまつりの御つう人ゝ一乃大宮の此前なりんやに這
もなりこあこなり　河傳志と云りり此なむとと早下志るる
花 あここハれとこ多し一之とと云也 事を合とれりてなさなふ
ホくれこの御しくあうしなるとして　そ
へこれとと注ひく　ゐしてゐてあこしそ
花 わこころへのしふんて　もの前とてわころふうとしいて
みなるきれしなのやもん　風俗前乃詞也
河 なるとなりしやなりれりしと伺うやらしてなりたうし河
やまとのなりくなうし 一段 とと乳悲そやとよかせそ二爪河る
うゐえらりやここそうかま 三段　風俗鳴る又𦊆大宮
西宮記云有政白直弁就諸段 如常上卿入外記戸官常唱高

弁 河海云風俗鳴高（武家 大宮）乃詞とて[illegible]にも不叶也 同云鷺高鳴る
何ノ文ぞや 一答 河海ニハ不是鳴高ト云事ハまことにもつとも
或式注云鳴高を鳴之 自用之義也 世とおなしに[illegible]也さら
みなつて座とさそとをしめる詞也 和らかう候との
由也今しみしをしかれけしうくいふことを 私此事之用
ごをひさそくちちをしひたる 何成座退き侍るへし也
秘 座とさきる[illegible]色さしておしきるし
何ふりもさゝやふふさり[illegible]おこなへしとかく[illegible]
是ゐしひかの也 大宮の座をふりしぬんて[illegible]
これゐるとりくちちかへふんなちか
儒業ゐると云凡公卿なとゐようくられてありいかなし
しかさ由を 久常と大宮の座よ入ゐすと斎給は
とのしゐらくぬすし済と称[illegible]にし
りのいへしても せいたて おうくありなとりて
なれん字なりとしてとうし 必無礼（ナメケ） 某紀 如それとも世と
封よ入くいてなそうしきちえんなるかけふさるかし[illegible]

何 楊弓（イナルこ） 火影猿楽（ホカケサルカク） 礼をよろしていちさうくこゑか
火乃もとみ楽の作法おもゆ祢をかくちいて候し
花 くらえんてくれ候しこうし
弁 猿楽ハちかくしてそれにやくふ法て之ひ入ぬるよし也
ひいよりのし大宮の花[illegible]凡御法て諫よきひしく行り
ゆかしくさうし 或作流ニたゝふへてくはかなうしくかくしさ
とゝこともとく火の[illegible]あるハ御これおしく候云御ふ
しひしきんへこらけある 候云の奉て凡門せ[illegible]れぬへし
家よる[illegible]にりてゐる法ろ作くなてい早意之なり
ねとしハいしあさんりて なるなるまてはしまつといさ
何 狂惕（ねん） 詞ふきてまんしまとはさま[illegible]ん
花 何されハあされ候る大意をてゝとい[illegible]意法ハ假転之法ハ
せい物ら候し也 一本ニ 字もまん 候ゐとハさま千も[illegible]帰し
人丹こゐてまんせてきんとさそて座ニハ[illegible]の候う人
進退せ候ともかゝ御[illegible]しつ秘しまして行[illegible]まんせ作法合目
有ましき也 弁 其法しをさせるへとなるに[illegible]

秘　式部卿まう人ゐへハゆし給ひし　宰相中将とあひて遊覧を
御らん源の物語しのひく皆つかはせしはるらうへいきとあし
うらさとてうられゐまうて　曰小書云若紙ハ字ミ帆とハ
されなんと見給しまゝ侍しおとりしよろし切てされなん讃
色しつをはいせしたまひせハたれなす人々しかの名よハいそし
りへこさしみて辞砂よろしん

それさうもれ給序ふ　宰相中将と源のおとうひ給
あそふされもしおり集りて　つさあまし給なり人し
御りまうる　秘　源乃仁恕深きかくし給り
ことにのよまうせ　別かくいふ[illegible]　ひさいし人へ[illegible]をとりて
あたちてもまうるたうせさいし人
年さいさ人ともしへし　一部
秘らすえて御らうるハ在ふつさく分る為のうし
さ御へこさうさり　公[illegible]上人乃詩文に[illegible]
さうせれへてハ此韻をいし人へこハおうしと[illegible]　給[illegible]

秘　四韻ハ　八句之詩とし

江　花木被人知　以名爲　中書王　具平親王

年齢稍邁擬詩情　被誘鄙牧一句城　鹿笑久抛風月賞
桃李之外忌花名　春天花木富芳栄　自被人知得擅名
何処未衰霞養色　誰家不害焉呼毫　句同唐帝専房女
歎嘆秦醫一里兄　莫恨翰林寥落士　西園今日接群英

近代則如釈奠宴亜席者四韻上卿絶句作是也

宰うしまゝ近乃りしたりて又詩と侍士らゆてまうる
花　翰林乃人の出紙まる色韻ノ字ハ切韻とて何字と名韻を[illegible]云
叶も見又韻中ふ頭韻とあてるりもえ又何韻よそで既去れん御
うせふ方すゝりもえうく

乃へしことさ此乃花たれし
秘　四月乃末[illegible]
危中弁[illegible]しつうし御つる　江　月ノ比乃上よ[illegible]の花をみり
秘　系[illegible]の人へ文章生[illegible]　兵部無品[illegible]

左中弁のきみといへる御に

わりなくなれるときにほめたる也なりけり

こゝろさしありけるにて世わたりの業をもとめ　夕暮はまたし

まなひの窓をもつひ枝の灯をともしける　秘　あはれしは別し

花 車胤孫康唐土にありて蛍を集め雪を集めし源氏の

君の世の中世界の業をもいとなみつゝまなびの窓にとりて

かゝるふみをもまなびてかゝる枝の窓に射しているを

詞に灯をは九枝といへる俊頼の歌にいへる九枝の灯なりける

河 晋車胤字武子河東人也好讀書無油夏月ニハ則生絹嚢盛數

十蛍照書後吏部尚書孫康家貧無油常映雪讀書後至御

史大夫枝ノ灯とハ枝ハ灯也九枝といへり灯と灯樹タカ心し

仁王經云佛告大王應作九色幡長九丈九色花高二丈千枝

灯高五丈　大平御覧第八百七十郎中紀云虎正中平會於殿

前設百二十枝灯以鐵為之と西京雜記云高祖初入咸陽宮周

行府庫金玉珍宝不可稱言其尤異者有青玉五枝灯高七尺

五寸　梁王筠灯詩曰百花耀九枝傳言朝會賦花灯熾百

枝之煌と是等皆灯ノ枝ト云也

私云灯ノ枝ト云支河海説也如何花鳥之義もまた可然也

くこれしふ

わかしの御はさらんあり　此毎句也

秘 源氏の物語といへり

河 御物語をとりのへさ暗しけるを

花 物かたりなりしに人のなをあらはしけるにやうし

私 源氏の御ことをもあはれなるにこれは物語をもてあそひける

とりわきていふきて　ものかたりていひて　命婦なる心

秘 草子わかれ心

わかれ給ひしらぬとし

うちつきみつりかくとらへし

今日凡学生在学名以長

幼為序物入学皆行束脩之礼於其師各布一端

延喜式云凡進学之従情願入学不限年多状惣加簡試其有

通一經聽預学生但諸王五位已上之子孫不煩簡試　東脩

之礼也　論語述而篇ニモ自束脩以上吾未嘗無誨焉

花鳥ニ今文ヲ載也　寛平八年十二月十三日前世親王入学

當日早朝召文章博士紀長谷雄卿　自持名簿賜之長谷雄

拜舞親王參堂　二世源氏歴儒業例

同後賢 正二位大納言民部卿 左大臣高明男
又執改先歷儒官例
源伊行 従四位上民部大輔東宮学士
後賢ニ例ヲ叶ヘ令例也 兼明親王男花山院侍読
忠仁公 天長五年閏三月中午 時従五位下 任大学頭従五下

やうてこれ院乃うちにみさうしつくりて 御曹司 とんさうし 一様
花 二条院中ニ作曹司給テ学文セシメ給ヘキ也 文章院中ニ之手曹司横此也
私云此段ハ二条の東院へ入学の後をいへり 夕霧をハ此花散里に
ふらうしにつけ給ひける 東院ニ花散里住也
はしつかたのみまかりなり
大宮の御もとにも 夕霧の祖母也
よろつの事ゆるしなし
此君ハ夕霧大宮の二条の院におはしつまては始うまく
みしかへ給ひしのみつくつ学文をうるさきことにおほしての事
一月にみたひ 大宮へ参給へと也
はかりこそまゐりたまふへく
なをはしめのことくもちゐんとこそ
まつるしきことかたしゆかしくこそ 夕霧の女の源氏を指歟
集ニ日本紀 夕霧の事也

大かたの人くしまねやうに 秘夕霧也 実しき心ありて
さらは学問のみにもやとていまてそうらいてもたえてしらむとおもふを
ものかは月のうちに
史記なといふふみを 安 よむことこそよしくつきて
秘如此
河史記 写廷裴駰集解
本紀十二巻表十巻志八巻世家世巻例傳七十巻都合百三十巻 杖為八牧ノメテ為八十三巻
西京雜記云司馬遷發憤作史記一百三十巻 金楼子曰正仲
任言史記一經者為儒者也傳古今者為鴻儒也 若列子故揚
子雲之列是也 蓋儒生轉為通人ゝゝ轉為文人 今案文人擬
生者擬文章生トテ文章生擬スル也 或擬進士ト云
いまはれうしうけさせんとてまつ我御前にてこゝろみさせ給ふ
秘 大学寮にての試也 大学寮にて史記をよみて試験
をうけて儒生をあらためしとて合格しくおもひてなり
安 寮試受 宗祇同一答字之奥ニ注之
是ハ寮試とをうくるとて先習礼しのそうりをいふ学生大
学寮にて試と察試と云試ニハ史記をよみてもうくるとなり

吳宗祇問　擬文章

ならんへと擬文章生に補して擬生と士とも云之
生と文章得業生と同じからず　一答大学寮にてえらびなりたる学
生しからんへと試に及第せるをば文章生業生と云之又貢士
なりけるへと年々に其後なりたるをば秀才となりても又ハ
学生と大学寮にて試に及第せるをバ擬文章生と云なり
范先股ノツキノ済之
儒業をつとむる人の将来をさだめて補大学生灯燭料を
給ひて九年此乃学問のつとめをなしとげて後大学寮に
て試の史記とよみしめて難義を問五ケ条ノ中ニ三ケ条二通
ずるを及第とす此文章得業生に補せらるるに擬擬七ケ
いひてそこの本ハ七年となれハ明に其にならへて七の丹乃学文
して其後民部省にて課試ありて先詩賦を作る次策の文を書

弄
祇問　策ノ文しハいかなるのことにや　策ノ文とハ儒業未だ多
なりしへ向ふ儒士ならで題を出して其題乃事を對句に書
て不審をたずねる献策の人即時に文對句に書て答をえさしむ
答なりたる　策此文ハ本朝文粋之才二巻にありそれを被見
范文先股之済之　貢士に秀才をさ士は二柱なり
あるべし

秀才とハ方略と云
弄　祇問　方略と云ハ何の書なり
答　秀才と云ハ先の文章得業生にならんへ召されて方略ハ二
字にて世境を立ぜらるべきもので　云ハ
擬文章になぞらへて
ことさらにて書るべし
范文次第
弄　祇問　献策　何の題のある　一答
献策の時問題に答へて書なり
此の文題さまざまにて文粋に出たるなり　ハ或神仙或ハ神祠鳥
歎言語運命山水松竹などの題にかけて其ハ古実を不審せる
まじき事を問ふにてこれにより答をこそかくべし
范文次
弄　祇問　此如何
時務策と云今と云事なり
一答　貢ハ時務とハいひて当時の政道などのことをいふものにて加
ようなることを問ひてこたへを文にまとて書なり
范文次
或又方略の宣
貢士より問ひて献策の文に曲直文をもって
なりたるへでそれハ方略の宣旨を給ひて当時を
文章得業生二人のうち秀才被任に給ひより給料を給て学問を
なしたるへてそれハ方略の宣旨を被下て或ハ貢士にて課試せらるる也
弄
祇問　方略之宣旨如何　一答　定士乃人方略をうけ給て
范文次　文入学ノ内ノ中ニ答る時が出来と挙これハ大学寮にて

試て文史記をよミしむ及才乃人を擬文章生に補す数二
十人を定とす公ア[有]て更に試て詩り賦を試む及第の人を
文章生ニ補す定を二十とすいつも或ハ依前にて勅宣を下
されてなるゝこともあり是文章生ニ補して後さらに方略
の宣旨を蒙りて課試をうくるものを秀才ハ時務策をた
てまつる是も方略乃宣旨を蒙れハ方略乃試と　花又次　文章生
尋　祇同此公名　一答上にいふごとし
方略をうけて献策するよりハ当職乃時とみな国の掾
に任ぜられ時ハ散位の時ハ唱ふ京官に任じて後々に
献策あるべし　尋　祇同當職といふハいつもの職ぞや　京官の
人不献策といふハ　一答　當職とハ文章生の當職也　其後
諸国の掾に文章生より任ずるを国の掾に任ぜて八任四ヶ年とて
六年めに前官に任ずるを散位と云これを献策とよぶ
なんどいふてもある　京官に任じてハ献策のよりハ左任　それを　非
試業の人といふ也　文章大将とハ今試ての人と　尋又次　或文章生
さらに得業生に勝して課試乃例を受　英　祇同文章生

得業生との差ふ　一答　先に擬文章生を云人文章生とよ
て試又文章得業生れあるりとぞハもろもろの分るし
も又次　或ハ文章生作と同りて方略乃試に不及のもの後にて宣旨を給り
又一方ハ今式例ハ朱雀院乃御時の前ノ試に詩を給り
て及才志のやうに古あってやつそ其御後に任じ給り
問　寮試作法　寮以次下名一貞博士次下名一貞茶着試席
出貢挙更名木博士加署渡寮及ニ見了下允以下次下以算
連三合置試衆座前又讀書木置及博士　寮方　課之試博士并試
衆等前次才名試衆々抱左進出帰門下作云版ニ試衆指而
就版元又作云敷居ニ試衆指於敷居下脱沓着座置帙並頭
作云冊衆唯而探冊　三史之問ナ日淺冊　朕行置試博士前試博士對賓及
云史記之本記之三之巻世家之上帙之巻下帙之一之巻傳
之中之帙之七之巻以作云合讀与試衆各披帙抱巻引音讀
之以作云古今未天試博士對以云文得多り以云作登科酉　者支
秘いふ大将　文章乃おもて大将也

秘　源乃おほんまへにて御しれにて旅しく　此ハ人系図にみへてまなし
左大弁式部大輔左中弁
もうせむ人さらに尾さき　ありへしとり人へき也し
注 論語云言可覆　注云覆猶復也書也にて覆勘とてみより
てうへに物したるもしうへし　不審也人へまる也
うこくみかよう　又漢のようは流布しうる心なり也
或ハうつしに注したるよし又うつしハ注しておきたる　ことくとハ音ト訓トなし
私此義不審
流よ志るしおかしれ　注 つよ志るしおかれよき心志る
とは注なれはあかしに合点せんとて志るしそ志るしと付るよし也
能く斎藤と合点不擬してとて乃御しれ也あとを心志るし也
また一流云角筆也なり角筆とは假名つりて也と注
て合点乃言に角なれく志るして假名と付るなり是ハ点
なれ不しをも流布ならぬによみあやまり心下此是根也と云也
秘 旅とあれは此とは志まてあるよし付志るしとそしてよしくる
ものろと心志るしと云なるへし

不審也不可心志るしと付也能しょうしかし　小中此物はとい也
さらへてさにたえし　秘 此人へたて大学のものふ入まへにも寛しとみて心
大将なもまして　伯父乃太大将へもうして枢衛史尚督源のおと
せもいるれまつらし　しのそんてこのかひいつきとし
度て之人川よりし　源氏思て
人せつなへそてこゝる礼なりとて　源の詞
人せうへそてハかつくなりとくもとゆくといひうるあなのもの弟
子花 子此おすれぬうれとや此のちゃうゝり志まゆく
花子此あへもうれさつひとく歎乃無有ありうれゆくと以へ志ま
いハされかたもや　歎の子はおもひてかな源氏此人乃人思
人まそ人ゆこあなりとのやうく八に思ふ心のもの大将
なりのこゝし給ふなれつらしこそ此の人の詞し其はおもてなる
こゝをやふさうし此のまゝにかなとと云大さ此るる今ハ源氏是此
あうしれひさうけてなりて
寄 此ま不志まゝ御所てこふ志てた此乃なるものとし　或注に云不字
と万葉にハ志まて別もうゝゆるその心なり　ちゃうゝりと云にかなへきなり

秘 志まそハ癡字之帚林莫ニ小志ゞせう
大将さうざうしからんハ　秘 式法師ニ立よりさしまよ
思ひしまつくなる　御師乃吉凶記之
世乃ひかりのまて　秘 世の人さうらうもむつましきこえし
さしむかひていとおもらかにかしこまりてし　大学乃ぞて宿曲ニなされ
世ニ不為也なるべし
はらへしうなへ源なへく　源乃殿へさしいだして師にたのまて
なちちまちちにあをえらへなか　源の院へうちにまゐらせ給ふなるし
おほしそなりけり　学乃ひく
大学乃君乃なりかたハ　秘 寮試乃日をとりて　秘問
まつりんみ　秘 大学寮の門之
るさざれまへ　秘 文章之　冠者の事之
うるまじらいはいまいらん　あやしきかたに志てある学
まうく其中へ文章生不立進士被下之　秘 学生ハ以長幼為序といへとも今ノ文
座乃ま儒をとりし也　
花 寮試ノ時ハ長幼とて席をおしてへの位地をいふなる冠

志る人ある学生とも其まゝ小別しゐたる
こころくもまことをかしけれとも　秘 制止をなさるゝ
をこしもおもくまれなるしくて絶けり　文章のすゝむるなる
それ作法にて膝をぬる
大人はうかなるはなれし
秘 文章の殿の良行にて文章生今
あれしかさうくまれしもくと先人おかしきとなり上東
学の文をさ蕃作るへきよるおかれ
秘 源氏ニハ奨学院　藤氏ニハ勧学院　橘氏ニハ学館院　をそへていつまゐりて
学の文をさ蕃作るへこゝろもありて
りんにんこさ給り　文人擬生　河 全楼子曰一此是指ニ敬之
今案文人ハ文章生ニさ給ハ擬文章生とて文章生ニ擬する也或擬生と
花 史記立條中三條以上ニ通する者擬文章生ニ補するなり
秘 進士　及才也　花崗ニ合ふしく志るさる学を教をあけていつくニ二方略
之宣旨を叩しる人を本ノ文章生とて士として志しるをなる
と擬文章生とハ云し文人を給ふしと云けるし文章ハ擬定と此心
後行者の時は前の試しるへし　学生ニ東海と中蕃よて試
むしはあつるを王荊公ヶ字外ニ九丁アリトテ　此是文への見也

夕霧はさく〳〵しこてゝをかしけるをもとなく翁の御心にそれは文
いさみて帥大納言も夕霧も心の底は深くけりまいりけれとも
夜みて又院へまいりきこゆ　源にて御とのゐ〳〵ここと
ちり給さいハ人（ことゝも不快）けり　源の数中はさ給ふ
まいりくれのしとんも　是ハ学文の人とひとへさまの内證の御事なとこと
源乃補佐の臣にて何事も無真なるをとりて
ふくて后にたゝまいらさるを　松 立后の事之　当代いまたき后なし
東宮の女御ことにてハ　秋好之
ちよへもなかりし給ふ御心　松 藤壺之前の梅壺の女御を后
なりちめてあはれなりける
はしもこの〳〵もとのふ　源の藤壺をはしめ給ふ事を紙に之
けふもなほゆかしけれ
源氏の君の心ちしこそ后にたゝ給ひぬへし　松 后に立給へり
河 後朱雀院御時陽明院 三条院皇女 中宮嫄子 敦康親王女 両后共依為
源氏春日大明神有御祈大神宮有御託宣是此是任為寛弘
以後是祈可閏色半桓武以後天下国母多大織冠之御末也

花 忠仁公以来藤氏長皆外家トシテ必執政スル也
梅壺中宮乃後弘徽殿女御之中宮に立給は源氏之本意といへり
むしろ源の時ととの〳〵へてさられて帝こなた女とハ皆源氏に
とられんを藤原氏の后乃中絶するをといへり
弘徽殿はまたいれんを　右大将乃女頼宮にも立給ふ入内し
これ自らかこよせん　秋好の后乃世すしとさためくに
ゆるしつて
あまたの式部卿しし今は式部卿宮にて　松 紫上ノ父之桃宮と式部卿ニて也
薨して後式部卿宮はうつりかはりて給ふ人のなくあるへし
字一 一動ハ宿ハ奉式部卿ハ親王なるにてはいかゝ源やまひていひけれ
又式部卿宮ハいさゝかもつまけみや　私ハ宮ハ内中務式部を
はなく親王にて官にもさ給をハ大納言兼任に兼任兼宮は親王は任之
わいかゝしてとまり　此女御むすめことおなしにはまことに
おほんしとして王女御　おほしこころゝハ秋好ハ前坊の御女也
是ハ式部卿の親王御女あれハ同し王女御にて源氏の君の心にもさし
王女御　河 王女御　朱雀院皇女昌子内親王　冷泉院女御

世以号王女御と　恵子内親王 文徳第御　喜子女王　清和　兼子
女王同　忠子女王同　寛子女王　同　班子女王 光孝中譲 親王女
嘉子女御 朱雀女御 文彦太子女　徽子女王 村上女御 重明親王女　庄子女王 村上女御 代明親王女
几王女御ふかきこゝろは唯をさむりしかよりひきはるゝ
李部王北方氏女　源氏女御なとあり
おほしくハおなしくかくし　秘 藤壺と式部卿女にとてかくれ
私式部卿宮の女御ハ藤壺ともいひ主上ゆかりにて 斉日
但し秋好も桐壺御門前坊と兄弟なれハまさしくここ
后　藤壺ともおもひぬらはし式部卿宮のこゝろさし[illegible]
むすめかのひめ　秘 秋好と斉
御さいはひ乃ひさしく　秘 右ちかく至前八不幸なれハる
語りしを川乃人かく人かくなるらし
おとし太政大臣ニ　秘 勅例抄ニ入ていり
河 皇子任太政大臣例　大友皇子 天智天皇御子　天智天皇十年始
任太政大臣　高市親王 天武天皇御子　持統天皇四年任太政大臣
内大臣朝大政大臣之例　忠義公兼通　天延二年任大

政大臣 元内大臣　但関白也自是後連綿　信長公清慎公なし
内大臣より相国ニ任せるし
大将内大臣に兼ぬるひぬ　左大将乃内大臣に兼ぬるは世の始也源
氏物語にあるにより藤壺と巻ニみえてるし
内大臣執政例　堀川関白 兼通忠義 天禄三年十月廿一日
内覧同十一月廿七日内大臣　中関白道隆公永祚元年
二月廿三日内大臣　二年五月
関白師内大臣 伊周公 正暦五年八月廿四日内大臣長徳元年三月 同日内覧
人々いとしくようれ　秘 此以下大将乃なるといへり
かんなるさむまけなれししと　林巻ニみえり
花 擁護ニさるひとつゝ　林巻ニみえて
あはれけしきにしこく　秘 これ卿のこゝし
くらくふはなしと十余人　私出来巻ニ載せる面十一人也
おとこれさう人かる　秘 源よおとこなと
女たる女御と　弘キ人之
今一とこは　とかたる

まめ人と御わざなりて　雲居雁の母ハ王孫也　今ハ按察北
大納言北の方になりたり
河　文脈也よまめ人にハまめ人と御わざとよむべし　師説同
末摘花巻にまめ人とわざと此箒木大輔と云て王孫也　二わたりて於
蓬生巻にて末摘花とわざとらしく云は隆家親王の孫にて此君は
花　致仕のおとゞ此女一人ハ弘徽殿の女御母ハ二条太政大臣の御女
と二人にて雲居雁の母王孫まめ人と御わざ　今ハ按察大納言北方
実ハ雲居雁の母誰ともなし按察ハ五位の者なるべし　系図可加之
さしむかへ給ふを見て　さしむかへ給ハ御かはるといふべし
後の御おやにゆづりし
日それにまかせて後のとやかくにまかせてさそ給はまかせて若君に
秘　まかせ給へとといへり　尋同
大宮にて　雲居雁をむかへて大宮に渡し給ふと云也
女御にて　弘徽殿　女御をこそハ又おとゞ此おほ君
とく世話ハ雲居のわきてたまひしをなど
とのく十ばかりのひて後　夕霧之
花　おとゞ此の世　式部ハ六位也古代の人を冠者ト云ここ
とのこにたゞちかくゆかしさ　夕霧ハ十二才也雲居雁ハ十四にや
又わらく　雲井雁の姫君也
おさなくちかう　夕霧也
きはやかにて　又おとゞしハまさとさくとおほ君をかよひ
と川両方かれハとものつきし今もみえかりしのめで
いつれおほくひけり　夕霧と雲井雁とのあかれたる
おもひせうくけり　葉子の比也
よろしくあるまじく　秘　学問しては若さにこころのよきといへり
おりふしにさとをしたちてまかり
うきおもひなるまじ　二人のたれさ何なり
たんたしけきとしくこさ　竟もなき葉子の比也
両しは太きやしまて　秘　太政大臣前関白太政大臣也
河　太政大臣関白太政大臣新任大饗年毎に大饗何生はべりて
廂母屋の大饗なといへり
萩のうへ風もなかておもひぬ
と見のうへ風萩の末てあれ　河　秋たに松家に見えたまてあれ

又たゞよう後川のものよりとて
むよてれと　内大臣詞也　弄同　ふかきものゝ琴にひきたまへるは
秘 大君也
女はきんにさしてふかきものなれば掻きたてゝ御抱よ
まことしうつたへたる人
比巴のよきなりとし
あふの人こそさる源氏
秘 あふにされとよりもとさへあげ給
花 世俗にあふにされときされなるやうなりと云詞は何の字の訓と音と
とかていへる詞そ此あふにされといふ詞とみえてあるの歎すく
まけ源氏かといへる文にて比巴は上手なとうそへるのつる也
ごくといふ詞とよやうくやとなるもかくれなるまていへる詞也
秘 明石上也
おほさるゝ此山ざとに
む大臣といへり見るなしの上なるし
物乃上手は後には伝まて
明石入道延喜の御時より三代と云る也　弄
秘 前乃大王は比巴のより伝へたる津前にまてるし
ゑもおとくいとんことに
明石上の比巴を源のかたのふとし
秘 ?ものに河くせ
合奏せてとはし也
明石上山かつみてはとうしにくさやうにてされたるは

弄 おもしと内大臣のまゝて
又にそしれり
大宮へ比巴をかへさし
ちうけそこなて
左乃ゆにてとれ卿といへり　弄同
柱ゝ比巴まてはちうしや云筝まては柱と云也　同事也
柱さゝ給そとをぞるし　琵琶也
弄 致仕按察　小方詞
さいそいようちそゝへく
秘 大宮乃詞あり　此上乃さいそいへなりといへり
身にそへてくもゐ川
明石北のかたとそのまくれそへてあるは
是は母からこれ居つまらんを　紫上へゆつまる心持ありともわる語也
内大臣ノ詞　弄同
世をそむく人も世よるを捨ても
秘 ?字是也
女御を第一うへ河んれ
弘徽殿女御乃中宮に立たまふまし
なりとりぬ人ゝ
秘 杖故にとまれゐるかて也　寄懐をいまてり
是わかる也　花同
これ三条とこに
秘 朱雀院乃御子後に今上也
春宮は元服せていまのて
是わかると春宮へあり世んでとよふ也
心さしくわかると

かくいふさいはひ人のゆかり旅なりき のはてなき
秘 明石中宮をいへり
花 明石の君をさしてハ宮となりのはてなき
弄 明石中宮をさしていふなり
秋かう京とハ宮を嘆とさて今明石上をいふて
をひをへひぬ事 河 いとひてもこの所をなをやすけれと
花 年比かくあひなき心し 立なれさし
かあのへ退洛し色しあつ給なり 私 此外一の説 河説同
そふらいへく給へらんに あしとて桐壺入内ありつハ又人の
あつそ行るをゆる雑ゐへしと内大臣にてよくなをほすと
なゆかうさしもなく 秘 ちらやの詞
この姿りは所ちら人 秘 忠仁公… 菅原氏ハさる
ちらへまこハさゆかふえひさけてこたさて給まりきこし
私 大臣にけしといふまりて也なし
女御乃比ことて 弘中立入内乃る事も 按又致仕按察使
ゆうちやとりりもちのかひしもそのんそやし
くりてむくむ給なき 今按察とたせハと大弘 蛤の立后也

此運あらんへしやうかよきこさ及ある事ハあやしとも大臣の
此の又こみくはしよはさに給ゆしともうりやしさまれ
秘 源ゆりまこうしうらんそようし
弄 按察乃小方と源とハ又なり乃明石にひなりゆき女御の
扇ゆなりしつれよ 根し給し
明石の御ゆ母 私 大臣此人中し
比らしれさりんさし 言ぬあしいさひたしといいしけれなし
凡乃ちりまさしあくあし 河 依らしさりたし下揚さらり給し
さるにやりて此句を論し
給ふなりへしやうかまもとし合と待しハ味のゝの上 秘 式御
沉家土賦し 暑之 應門周孟嘗君ハ行云孟嘗君に 君
天下給へてらもまの茶の風を待うてし心しなりくありて
後ハ云てしされ青ちうし塚上にのりて孟嘗君へ云ゟそ暑也ら
なり給此しいつて入るゟ御へさしいふと中のてあり之見ハ孟嘗
君ゟ武人の云るハ雍門周ゟ明をとせ人へて皆臣と語りしを
孟嘗君へ云ゟて我ゟて御へしりく御しなをしへと又雍門周ゟて
にれハ必ちもあゟせうもるゝしいゝて孟嘗君へ云ゟ市へかりてゆ此の花

花荻葉にはゝとは是葦にそしあらしかなしん後乃事也川一西にて源たんとと
諸か其時根に流るゝ晩其時雍門客にもとに
秋の時諸人合をやりは前の人ち仍君之
河 秋風楽 瑩波湖律之 并
秋風にはうさあはせ
私 風乃ちるゝもとつし出くるか似合なり
ちかさの人もしとて 大文れさぬ多のとうつらし
多すり人耳秋しれ和琴を弾かるしとゆかてみ見ゆとてう
つらしこひすてと左のくとしいて
いとくそんとふや 感をとらんへかるし
さゆくふれしのふへよみるそへかるし 大事也乃気有へき之
此本に自らそく 此子乃あはんにまと本下ってさせう給に
とさくたいとんを 秘 門大臣詞也 字女大臣絵のとを言葉へ
伝しれかもちのあり あるもゆちこさおはくし
秘 もとすその後りそことはゆくことゝつさく
寸 給会に源のくのおもしろきと門大臣はそふんし
くとれくゆのしのその分をあんと 私 給合也

常ニハ源氏其ののちもおほつかなし言ふかくなる事ニハ一所し
其の文さ世のおとこ見てよろしからぬもしとく
とかくおもしろさ心さしのへ 笛を出してくるまて
笛の音ほのかなることとハ 河 向子期思旧賦 席右有演笛者
発声寥亮ト追想曩昔遊讌之好 文選六臣注第十六
秘 おもしろくしおとろかしうしん
花鳥にさうしたてまつりぬ 河海にもさうくそうし 笛柳子
秘 うるはしき柳の枝にそあはせて桂扇をてらしゐるなるへし
笛二をとりて柳の枝にて占ひたまひしかれあへるは柳の枝にてうち付ハ
ことなしおきけるへの笛とみて二本の笛とおもあつかれるなるなり
致仕乃大臣の御あそひありけるにいさゝかめてとの事ありさと
笛の用意よりふかく色々ちる時ハ扇かたしとおもひをとさく
ちうしに准していへるかや 秘 うへの心しおもしろしとを本より
河 哀文 催馬楽呂 秘 催馬楽呂 哀ゝ
萩か花ずりなとそ
こゝもとふさんかきねハ雅ゝの心のり萩かひたり 花鳥説面白し
花 今案 冠者一五人浅葉の心をうたふなり人を織出せよせて大事の也

前ふくてとゆう夜人乃上つとうらひまかせて
大とのて　花右大臣の数任乃表なりしるし
秘　花宴に右大臣ときこえしハ源氏のたくめるなりとへし
私大臣ハ源氏ゆゑの可ほどの人なれとハ氏内大臣也をさ
ゆかりある事と前にまかりそのかたといふ也
明らけき　さしわたし
志おらく宰相と絹く　あまりにもわかるとおもうしはなとはて
むかしの着りたまへとて　夕霧は五位にて軍をゆるすふ宮は不得昇殿と
志をしやかうくそろえそのくちハさしかたなをとりなしめなへし
いかなるこさとし　ハ
秘少人ても　大宮のへはくうしおもひしく式部大輔をかる
はあはれにゆるすとりなるへなすかへし
まさしいくはるはぬりやうかけて　秘　夕霧は明らかにいとけなきなり
ゆかりの宮まてもて御こころのかまふへし　内大臣し　大宮をは前をつ
思ひく人の御物乃そうとて　内前の女をとれにそへて上れなる
とりはらへとも　夕霧内大臣の仕うへし夕霧をわかるのみといふ
とれるゆきといくこまあ　ありなかなるし
秘　はおもみてふくなるひくなるすれいとくこさぬへかなし
子を志ろなるしいふなり
史記　擇臣莫如君　左傳　知臣莫如君知子莫如父　知子莫如父　日本紀　知子莫如
父　昭十三又如此未勘之　大学　莫知其子悪
つさしろに　とうはつくひさきともかなし
されそよそひよりぬとくれそはつくるもと
夕霧とさかなしのすし　秘　内大臣へて
ともせくいそくほひぬ　只とゆりまて
夜そ今よそしおさせ給もれ　はりゆかりにさうの色とへて
こさてつまそてしく内前ハゆかりましそうにむとおほしすと思ひたまし
御あらけ　ひ　あさなかまるはかまうし　内前のいはくれ
年はうれおもうしてうたまてはうさうはふおりまれをていて
はさかさことのへてハ　そかなるなりあそいたしくへし
大さはゑのおもりしゆしつる　もう紀なまそて内前をと夕霧に

らうまうくてくしつうしこしとなりてもいとうし申すまじくとて同じ語と
女ましけ言なり
まつりしこなたにと　秘　内大臣此人をとくてとりへなり
是こちまうるう　内大臣の人て
あしきことをなくのと　冷泉院と申かた大臣ありしひまそ人を入
めつらしきなるをなくかし　ゆりをこなりしにし是一門と
打とて此ちなく斎宮を立つめのみて　秘　秋好中宮の事
此御方と入うなかん立后の人にまうしとはもとゆへて
こくちいハ女人入りまうさは　若き御てん入ましくなうるへんとらそ
なるへし
是此御中の大宮ことは
うつせおさまりてハ　絵合なとの時のこと
孫さえんくちまて　源と内大臣との中よし
大宮もさるへき此宮大臣を此後にもうらへりのを世にかなくなりし
かの宮にもまことにまてもうせくへしんかしんと
内蔵のくふうるの事

是まて内大臣此とし大宮の事と桐壺の宮の絶と
めさまし大臣の孫にハこの人ての事とうしとのさ
まと孫うしとも内大臣此御事　此義同上本ノ義也
私是人て此さてめさうし又大臣とハ大宮太政大臣の女二人
冷泉と大宮とおもしの中宮ハさりぬとうりかなくて
此いひしなる下その宮の又とよりて孫うしとおもはるへし
さし給へさうし而内ハ宮の此とそのうちを後にうさなりける
たのもし大殿此義今人の也

そうしおしさう
鮮ノ字なりさ文地乃とくしこさハあさやかなれて　私云あさやくとハ
私よつりしく出けさとしあつてハわとこくしきこと　雑揺（ザシフ）日本紀　鮮（アサヤク）
或しとそおつうなりめてかまとへしるてとなるへし
御讀も文またハをとこしさきてハなしらけに人と也
二日うりるてしありなくへり　大宮の事と此内大臣はなりしこと
志こそうりにありなりけて　秘　御宿ありまうけ時も大宮の牒かなるへし

はあまりけこむ　尼顔　秘 さけ尼乃事也
まれなるれと　弁ましも讀ぬ之御事のまなかうかなき
小よ世は詞しまれし讀ぬかの字とやりしをなし
これさふう好きも　内大臣ノ詞
よろしぬりのこく人まて　秘 此君ふ大夫ぬ君そしく一歩
半めいくこさぬるとなり
かくもおりふまへしやて　今ハ何をと会見ふ高しきこ人のさん
そや後文してなりけやうさ向ふのまつり詞也
まま家にしなるはかれまくしりひて　大夫めりて詞ひ
源氏は其さめて意あるとは見ておもさは之驚なきれなまつ松源氏
いつやうなるめり
ふおこさそてそ　満年子のむまぬしんとく　秘 大夫ノ詞也
さはりふいとれしたれと　大夫此なると　さんなとおし
もおかれ内大臣此ふとなり
るれり　れはりけふ　秘 内大臣此と兼也
おさんれよりのと　秘 此ことをあつもとなりしる

こうりハ中く　浩句内前へもとかるのかれしこさと
まつやふとこさまし　にひあしたらしうぬ　注本見るし
さりそて人しとなき給　もしか后をハ大弐へちう御世なると
なうぬ人なこさいそく　花 源氏乃君のるし
秘 天下無双之有職也　源氏弁夕顔とまうしていへり
秘 是ハ花族乃もとれしむる　とらふ見
えうし花かれのうはそ　夕顔ハ内大臣の母うこれとふ何ゐると云
あもつれれ　洗つきかし　つうさ心也
さやうれつるまひそうすなるぬ人のふ何しきこるりとし
なふたうりれ取たにもあしぬ　秘 男此中小く花了し
云まなこさし夕顔とゆしか后とハにとこなるといへり
うれ人ぞハゆわふて　夕顔此万なく縁へつるとし
ゆりむつるれ秘らまふましき　秘 かつししま家なる也
なとしをけすあるそは　源の此心をおもふて此あつる縁へ
ここことしハよはさりしとなり
つかしとなふせとおせてもこて此ら而りてあるし

源の氏事をとゝくめかみつかくことゝさへにけてあて
なしハまさかつしもれずしもゆるさぬへしと也さう
多かくあつハしのひせてよくへきし
ゆし承まるゆふて　花 承ことゝくりてあけるゆとかふ也
嫁喜の紹式なるへのるへし　川 清くろいてとし
おされまくてかくふまいせて侍らん　まのちまるを
定めつ大臣の心ふ御せて表つぬやうまそ大臣のおもくつるい曲
ともにしそと恨となりぬのし承久しのへきとあふ也
葛ふて知りのえぬ　秘 大らやなり
まれかのふもこそりり　大臣の詞也
そハいかにならしさてらいにとに　秘 秘ともこふ八人をと
ゆかけるわよそこきて此大臣のゆあやまちとも思ひをと
かるゝにつゝとおもひ　二人なんてしかあうやふて
しくれのよそうらのしこきて大らやの宮ふて
思てそまつりしよう　秘 此帖こそとはこしてよひとよら
人をつりしいるし　かしたれとハ別してかくしうつらん

そこたあのしいつてしぬるりさと　内大臣のをめかうぬ
るをてはとらかとよらんよらんにまてうりしきし
おもひよそかれかしとんのやられまとひく
清子なるらねし源あれとんのやしとは宮ふへいまさいてける
こきゝてと男女の后なきとと承り心のわらひいそこさて去りと思
さ後ふそてみうしますて八あり　ふて知りかりぬるあれハの縁て
さそもうまれハヽりつ御すり　色ようハいやれのりのやなる
それて不實しのふなり
よらしぬくへのことにつきて　唐土なとゝへさりふ施
それとよらぬへとはいふなり
こまハるめんと　きちくしゝつゝゝとし
すかしこきこれりしも名やちゝまさん
秘 紹なれる前をと人のいふやと　弁同
若意なりハやうふれありちうれそかきせるあけて表名れ
まされてハとも大臣のゆふきむ多しかうるりと知りあらめに
なれのうさくゆかもれうくう　私同大臣の詞也

不定なりけるにてハあらし定頼なりとけるかて
さ侍りし人ことも　一日ハありしと紙のまよひ
くちおしきやまさしくれさひきへらてやとて立たまひし
内府驚慎殺せられしさ侍なり
心しまゐ人を　まかりよく知りける人々し
一夜ハありしこと　まことにそのへハささとて
ことはれくと知りまひぬしんようれをほさんとまて
かたきてなふんてまくて　まかりは方へ内府おはしまし
よりきへとりひかし　秘　内大臣ノ詞
みおもさらく
とれとて侍さりてたてれりもれ　まかりさまてりて
なさとてかしらぬおつ代たる御さし　花一条のかれおほき
さいなしのまり　ひさいなむハ罷くたものかたはとちかれ
くきりをさみとのはいつさむまる　兼
河　康子内親王　延喜皇女　村上帝之御時弘徽におはしまし給ふ
小九条之右丞相忍ひてしのひまいりかひくりか後にさきあらはれ
て出入のかひり雨隠太政大臣公季公母也世継右京大夫道
雅寮乃前京大夫當
同　丞相欲賤子罷汝右府公孫誅須眉　二条后皇女　母后嫄子
秘　醍醐皇女　康子内親王是　河海にみえたり
きしこさ紙ありつかまつる人　秘　娘なりとのまそてつかまつらハ
つまれとは
さうへこまひまし　又北のかたよりの次第とのかまりてたて
あまたはあけたれともちまして
まれなりてありしよりもさしまして
たかや此れをおほりてさしまゐらくやうに身ちり御しまつ給
ちんすまてハまことさなとくわ思さていらしく
まことしつりよりハ　此后ふめのとくちれはさいあまれ公詞
まことさへとてとうちされたとし　是ハ世上乃人のうまきさ
ゆかしくれもる伝おかくし侍さてかれと
これも今昔物語にしこさ語りといふなり

とのゝうちあけゝるし　内大臣へ陳ある歟ゆへにやさしてまれ
ところ〳〵に合たる事あり
よしあるやうなし　内大臣也顔し
私云此按察内大臣の姪ちかしき也なりけんかしこう
なとやうそうろふぬるすと　人を何ともいへる事ハあまね
未やいかなとも　それをなをと尾りとし
今うしろなし　内大臣北のかたへさしあたるを源氏とし
宮乃御心也　大臣なり
そこらハさまかも　秘 女のかたもちとはいてかすゝ
いかしをしこさ中にてうましく　色かたるといふらく也
またえいとおしこさてその中にて女のしかるのよしられさや
うふかのふうさましきまてく
あれいらしや大納言殿　秘 按察大納言殿とかたる也徒実
弁の少将の母按察大納言北の方まて猶ゝかたへふけるかりんを猶道
めくらさまてくらへの事ちハ　父親もそこへ入すは
さいれなしされと女御にとあり候ゝまゝなしそなし意なれと

ひ御后にないぬるすとりて
うちなけさのひく　内侍の程し各なんてよかるへき
くひあるへきなしぬたし
いかしてかいふらうに　これ宮に成ぬこそとりてそこな
たぬ風にふ志なし　るゝさまし
ちうへこさとち　内侍乃女のかへるちかくと方(カタウト)へふけてかの
宮をいとくおし　かしおかれ中にて
大宮たるすといしおし　とはおかれなり
中かておとこ宮乃　秘 父親とハ北大切に文の事とし
なさきかのふこよるかさるすは風の　大宮北の方ハ内大臣
はさましきるれやうふれのまて候ういくかしこえさく
りかしよういふうえひつさのふるす
えひまてくそのゝりしとあこそかくおほ之侍りしあそとえ
秘 内大臣ハ氏姓一志をハ
私大宮れゆそうしつきてくえなしのかへくしそまこ宮への事 花宴
なすゝえひゆるまゝ内大臣ハうち按て云のりしとし
とうなうしてなとへのはくせあらたあつえやうち御ふ

秘 書家を伝へしと見て八代夕顔すがたに誰へゆきし こそあらし
これより又也あらんこさんれをいとれとこ人情にて 活
大宰の上ん小ちて夕顔ふりて三井寺よりまかれてある常主
れ女なしをとあそらん乃ほれをさん小し結句不足とこえれとも
をかほ也さしれまされもうりや　三井寺よりも夕顔よ
ほんさしまされいくるとく小夕顔ま理と付のよて
たらしをらいれし　内大臣の乃子と諸子らかく見きて
御也乃うちをとりんをおきてまいらしましていかお
大うらふくちれ内大臣のたつ家と根し給ふま代ほ也れ中と見ん
せなりるくいいうえうり内府れ後宮しのへんとく　蓍子のな
大宰殿ほんの中と内大臣にて見居るかりとく
くれそうらんとても志てして　冠者の名
内大臣後宮のるう　を夕顔れ志てぬしとく
一ねも人の志をとて　一日内大臣と来りまゐけはのる
いとれうとおそくしるものあるんし　蓍子殿ら
家まいそいひ志ゝれ給ふることに　常られ夕顔を太宰殿

給結ふらこひのふうもとふをこを井藤の子方れんとよるて方ま
宮にしく給ひ志らひのりて　行所こ八家まいれてせひ志られ
となって注よ是非思ひとあらり
本にれより内乃おしくれ
中し家ありま　ちつゆり三ちとりて　秘 太宰乃詞
ぬも志り給そてやし　りし六りかまる也そやとく
四ふりれ給よの　秘 夕顔のんて
何よとにっ給らん　秘 夕顔れ詞
志川るる給ほに　蓍句ほと
あられふんちりして　太宰殿は小夕顔を四蓍しくそ
いまよりるり　秘 太うらやの詞
よくふいひあし　徒よくもえの給ふらん夕顔といふらい
給ふんえてるり
いとも見すとるも　夕顔れんは今八見うよりしもつこと
となけりし　花とし
おすいりあそうし給へと　夕顔れ何とも見はまいらせ

祢こまひぬるにあさましと　夕顔の履に似ゆるあさましと
んけくかなしく
なりはしとしきて　夕顔と云井為とのはなしは方
此中乃悪しくてなるへし
よるまうりて　ゆふ顔し
世乃行ふまちとられて
風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行　白楽天
おされおくちふて　云ひ井為のんし
云ひ井為もきこえとなりとし　秘 さとよしきとめし　川云は河
河顔のさも云井為もきこえやそれを如此のなかりん
いらうかりしなかれもこれあけさせの人　花 さし八咏の挫云
をゆめて冠者此中乃さうしとあきかたに乳母子に宮也
小侍従やさのて　秘 云ひ井為のかのて子
弁はめの乳母子なり　云ひ井為の乳のとこし
かとりて紙さてかひたるも　秘 云井為もんし
あひなくはつかとひさいまし　まつしくとひくらしと

川入るくおもうかしうへらぬ拂し
おもえれもきこえめし　まも　某子非之
云ひ井為のあそれとはさふをいて　り
夕顔 さくらえにきこえきれ　あふひふなり
さよれうにあよりひらうれうまきまうこて咲そふ萩のうえ風
を冠者一君此分し　あよりひらうすとは咏云此云井乃為しこゑとや
此日とりて也　弁 自面あうせてうつしこさ心あるとも
秘 夕顔云へしとてさうしきこと　形秘弁あ孫こ義と給う人
あかしきこしまうかなと　弁 川云 秘之印し
秘 古版 大うさ此秋をゆらしはきこうあらう萩は風とまつあう月にきむ
咲よ此秋も月ゆてきこしれる秋風をまる紀抄しおりひるる
川云ニ咲よ此秋も月ゆてきこしれるは古今此絶句の萩の上風ふ
月ふてきこしれるかあて出井こなき夜露ふなりしと
文此あまへふくり　夕顔ハ古文此はあうり（徳り庭の萩へ
まうはうしに　三条此文まて夕顔乃居まふくこく
女たちはきこれありしことのし　云井為乃んぬ内もた

此宮ひしさ後さもつうしく乃しこそさ

おもしやいかにせんやいかにとてまし　一おもき人の

ときたんしよのわかちてきさこそねたるのさ後なりとし

おもしらうしなけれて　夕霧なるとそこわれにこそくく

又うつはれりんへこさ　し滿てうるへこそいとも心あるたき道

御ゆしろしとの　　之井乃守の人へうるとし

おもしれ御かはんへやさきれへこさひ侍　いまさこさやうけれん

たゞしもちうねいさうるへこさ深をとはうこうしいくれ年心ぬと

くちをしく乃しく夕霧の巻にこそ宮のふしさ侍し

はらしいかなのましに

之井乃守を尋ねからうへきうしなましとし

此乃方はうがしよかんもこゆりこそそ　秘　内大臣し　母宮へしまり給へさ侍し

大きなるいつうしこさは一字も多くて　　秘　之しわれ継母と

しこさ侍し　　内侍捨遣わたしもさとしかは

中宮よりそ侍ひしれくとありあつれ女御乃世中

秘　弘徽殿は立后なれと無念の心ひものかは皇にいらし

なんとち殿そわるを里かりけるへこさとしいはし給へし

されうふへ身つしけふくりせあひて

秘　立后すそなれは寵あれはさとうされは当ゆへつかひ御心のうえ

さ侍りいまへは若ふうさよれ後まそもしは侍し

要　院の后へつかひ御かめ内乃常ふまゐりて女御もさうれ給ひ侍さ

心ゆるひきれ

さ侍ゆしば女房を中宮あえし院はされたりこさんて

たるへくとも

　要　内大臣の女御のありしへこそしわるる

と語の侍しあらんと人まは之子にへ又れは先女御とまらてき侍

侍ふまゐりてさせ

秘　之井乃守をとらここさんてまつ女御を侍

ふかうしあまてまつりあつて

御いと侍しゆるされうそのと　弘徽殿ふかいと侍ゆるされ

うちは内乃之ましいまふなから

うちむつかりあてうへをふてや

　ともあるく侍いと宮をいうしあかねとし　主上の心一字も見えなれぬく

それかく侍ゆへ

侍とへ内大臣殿の後世ても見えるそれし

つましくみなはさうまうんと　内大臣乃詞　女御の佗言まて
流石なりとし　女御へ申なきなり
眺望もうして　宰相のきみよひなりんするといひなしなと
いとさしましりをよんもつなか　弁さうしく候するとてつるんと
夕霧をいふり此頭巾益元　私安抄ノ義ニ一用河花ノ義元ニ注又
河 鱐サクバリ 礼記 特日上性式流流にへのなゐさうし流とさるく書云う
と云事アリ、て又さうし在上云元クネカトリトラト五音通元在通て此是秘説アリ
花 鱐ノ字を作くまりとよなりむそなうまとあるを此まなとみて
とく物し　礼記内則篇童子也父母よつてまつる時必小具なる
おあって冠をつゐの字ふくして父母よつてまつる時の礼義をかり
おきんうた此さく書り一例と見れたるへ侍らんてもしるへ
うんさうしき侍しらなそいふ流すんと及てうことろ
流しるしん池渡かてん
まいとあへなしと　秘 大きし　無念し
見とうおきんれし女こ　秘 葵上こ
こんへ内大臣むつかしきおひしくあるんれ大きの詞し

宛ててのりて　秘 近江君のうた思ひしきさ有ふてなうて
うちしに侍りて　秘 内大臣の詞也
心に河んとてよすへらぬうつとし　一緒とあらへし言ひれかれに
宛てて見えてえしなはつてくとみる詞とうけく心の宛てにて
なさきならぬ心にて宛とらくやれとし
あく宛てこておりよのへる　秘 源氏の備てなかれとくは定と
内ふさうつ候う世中さらなし　秘 女御宝おろし
うし侍まし八　河 若き　弁少将と讀む　扇をうちたたく也
あらさ侍り　白地アカラサマし
それみへしなさせ　秘 近江君を人とかしなうし
つうあ侍しくあちふくされ　秘 大きの詞　私大きノ心也
私内大臣此心のとゐ所をれ申八是かにもかり石
立るをと侍りありとうく時るとはうもぬあんれに
あしうれあされてし云まてあてたへ此ねし
おう人のへてそうしさおみをなまて　見えうさ侍くふ見えと大き
此こと語なり

くさうれはかなんとて侍て　秘 夕霧雲井雁なとのこと
かやうの事を母をもいふらんかへるハうらめしくおほしく
みさものあらめ　さて又夕霧雲井雁かへるハさまの
内大臣の我の心をさへふかく志ありける大宮のしれる御ありさまの
てかやうにありしへし物の心を情なくさてしる　歎くれ中の
我こそなしとや此おもくハ我乃思ひ居りも源氏の御ことの
みゆる人ハ女のかたりやまらねのこの給ふなと恨し給へ
これよりうしろやすなりとも　内大臣はらたち給ふまて
まさにくれしあらしと也
おしくもくさきこれをとあり
此はそ志けうかりのゑんさ
給へとみへしにあらぬくはしけさしと也　哥　秘 一月に三日とかく大宮の
秘 若雲井雁に常をうるともやとかくひつかへ
心れあなうしくかれくて　夕霧乃内大臣にあひて
とかのうへゆくかくうけかれけり
たれか少将兵部納言侍従等なと　皆大宮の御孫也

左ものうち　おほかたの御かたは中へハ此人々ハ入まうなと
大宮の御孫　是ハ内大臣の子夕霧に別腹なり
それとのくたりてあり　故按察使の北の方のまゝ也大宮を継
母なれハ此人々なれよせまうく　大宮の御孫按察中納言の子にありて此内大臣の
その御子ども　秘 夕霧に
これつ君にへくみなひあて
たちやれハ人々さしても　秘 夕霧一人をとりて心をとひのか
まし此みなの事とそ　秘 夕霧に依りてハ雲井雁を大切に也
まつしよかりしあつかし
うそてまうり給ひなんと　秘 是と川おまゐらせさせまし
身を今のかけに内にありて久つくし　内大臣
内大臣もと来て内のこて久つくしは正と思へ心也此乃少男
意なく見へしとのよし　哥
いふうひなにとかゝるらいひ侍てさてかやあかましと
花是よりまうえれ人に云ひかけるし
秘 内大臣乃心中しりて夕霧にゆるしてもよろへきとハおもひたる文

それとなくちからもしなく　夕霧の官位をとゝめの
人の心かとのたとうしらのしう
あらてれすとく
ゆゑさらに心やすふりてあってこそ心うらめ
わが宮の御わたりしあつてむこそとらんと也
せりしいさむとて　御諷諫也
宮もよもいかゞちらふ　若き紀也　大宮の御機嫌さらふ
心あるのかたりもしとこそ心が内大臣の機嫌也　御心かくしとて
こゝろみしこそて　内大臣の心方にて大宮にて女御の
心よ紀にとのゝりと思ふしてこそ雲井の雁をとよひとらのかて
わこしのふなり　なり　私いふかひなきといふなりこて
よて内大臣のみゝどもまもりし若子の紀にかゝりて大宮の詞とも也
宮乃心みまて　大宮より也雲井雁をのなり
秘　あまりしとのなかり名こそ紀乃ゝみにみそをなりのる也
わきこえとりしこそもとめ　み詞也　内大臣の御心大宮
の備也るこそ雲井乃ハなか志とかんかへそにとて　反對の返しの

いとおしげにおぼさるゝいゝて　不及沙汰也　御心のおりしくふらと
十二にてあそんをとしそる　とうゐもし十二にて夕霧に二一あまり
うとなり心えしうそこせんしう　あまり
御こゝろしらはおかくとしいて反して古めしく紀の子の紀かへ小ゐ
秘　こゝろしうこれをゆかしうかきく巨ノ字也太政大臣の心
いとかうさけれて　大宮の詞也
かんたうもの紀氣色とてそ　大宮の御まらしいかにして也となる
紀のゆゑをこえまつりこのをさへあつかさせつるかとし
うれ給ひのなやいつらなかんと　よいけくかくにかへら
まなんて云ハ氣乃ゆふくり雲井雁をハ上手さりしと紀のかて
宰相君てたへつしこさ也と紀　雲井雁をなり也夕霧と
はるをとちらしとあて心をものけれて宰相君
なりと君乃心のゝて宰相君　夕霧の乳母也
おなりし君もとみれ　宰相君の詞夕霧を雲井雁をのまりよ紀
心ゆつりとおもひしをうくりよられのかるうとし
反きてよさ給ふをゆしかなし　又内大臣ハいかなる人

猶とむまうたんとのあふみて同くゆるし給ふやかいひさてうけ給ふ
いとくちをしけれ　近江の君の詞
ゆくむつましきこそ　秘　大夫の詞
いてや物宰相しけれ　宰相の君の詞
まれまれはこのやうにをとなしう
羽なれは若き字一段也　秘　若君我君ともあれこちのみなす
宰相の君の詞ゝ夕霧の乳母也　秘　若君との一段也
心憂き物しこきまゝに　夕霧をそひあるつまりのふと憤る心
思ふ物しさきまれさせ給ふいふなり
この物しはふ入居て　夕霧の心にあくこと有さこしめて
人のとかみをよろしきなと　思ひてまたちさせ給ふ心也
よろしき時とはあ絆さり此時といふ也
此君の心　夕霧の心と宰相にも
あなりとらくせめしかえり　大夫へてゝいとか御さう
たちて近江の夕霧とあふたる御心
なとか此かいひしつらんは　秘夕霧の詞　内大臣殿まで

さくれなひやしなん
秘さつまた又さたれし　頼へてをと
秘さらハさそあとりうたれ　こと添て　さりれし添まゝりや
なとてさこうしひまそ給へりつる　此段ありいはんにも
あまへりつまりのをとなこのて
まつゆもさこそいへら
意しとはおかしなんや　近江の君の詞
あとうしうちうなつきさりを　またまた夕霧の君の詞
いとれあふらしはり返まして　近江の君の詞
心もられは対面しの字火大事とうれ　内より退出の　それより昔
内大臣も林中より退出とく
これやなとおもくさたけし　秘弱破てや　長恨之
内府の返事におもく　へた神とりて
いとおそろしとおかしてよろしき
おちてこれならさうふさ物
さても此うれしとなるは御ゆるし　近江の君内大臣よ
さはいかに夕霧のめしてもさやうなまてさうれしと思ひ給ふる心

とハ一向にくるしからすてさひならて六条の御方乃御方へ人の心
をうとゆへし源氏の心也
秘 夕かほのくるしくもなく　あはれのかなしき
御むねのやむ事ありて　惟光朝臣の母の事
言葉をとこてもかれよりそれをちまたなく八
秘 此頃神と云ふ乃気りのあへぬよし也ハそこにとかくいふて
いとやうこそ人の世のおもしろのとかし　惟光朝臣乳母の云詞
なかりしものゆへ八　内大臣のゆへすそれハさそと也
れ給ひ又物まへ朔日□きこと云母のことの上る事
みなくゐしこそ物乃よしかの六位ならせましと
河三条のうへのとの冠といふ事をつけたる詞　六位をハ冠の
いふ事也りのとハ冠といふと云
ひ いまこそ位にかゝり御ふよりて六位といふ殿八上達部也
上にさうし給ひまさせ八まさ殿の御なりとりて
かくこの屏風乃うしろに　夕かほし惟光朝臣をおもへる
屏風のうしろにて乳母のいふをきゝてのち

あはれともこしきかな　夕かほをおもふかなしむ
こゝそてこの物あはれもこうしむらし
れさてのゝ　夕かほの朔日惟光朝臣の仰ひをすへ
夕顔 しなかひの涙を袖のこさきの袖のくをはさしかひにけり
秘 夕かほの云□　まくあつたなり
近江君 人をしれ者のおしさ御その志ら侍しいふそあまる中に
ひ いふそあるの中衣とハ冠といふ事の法ことりとこみる
ふつさうる姫君の乳母云詞
秘 うち給ひてよ人のゐてあつかふあかいりなる人に添つる人々とと
原いてもつかるをうちかてうらうのひぬ
内大臣の人おさなくてことをまち筆をかて
わかのこに　夕かほの云てふし
牛車に乗りてまうて　惟光朝臣内大臣の心
ちかくなりれし　夕かほのかし
殊にかへやりまて　大宮の御前へまうて夕かほの御
あまりやうみてたうこゝろなし

さらされたるまうし　人々もみえし大宮人てうたて
名のりしやうに方人いそこさなき房の学命の絵不遂
道乃有と人座りあくれ　秘不及行云々
所人座りけむあらむなかに大かこハいさゆかいはていさ結ちあん
少々方
竟に有りうこそ心もら人分けれの先乃宛ろしう後の作
秘京に氣あのしろ　三ヽ句殊勝しと
大よのふそこよし五節なりるふ
秘源のしきろせらゆし五節ふ惟光のむすめしきろし案
案問云源氏乃君をこ公ゆ乃ふるや　一説云絵むすめあち
あるへふきまかせら所公ゆゝ又吏領分ハ国司しある人の光
と以乃五節と爲律行り　或御説ニ五節ハ受領のまう
師律られて光をとりたるひとらるし　真あよき縁なまを
のかせてとうおこなふて
行りられはいそ行あられて
いそ行せさ縁のふ　秘さある絵営まそハあられ作と
ひんとし乃北るは　寔上れらこなるへし
秘むちろ皇れらし

しられ夜のくてれ　しられ夜とハ暁しられなりと
くらは大かこはなりそて　二条院のるし
中宮よりもまうハトつくへ乃まう　秋ゆよらとさ
ねくあり　ありて
こふしよ五節なりそて帰りて　それ藤壺の諒闇
ましハ文あらくそまうこうそくこさうをつらう
涼闇により　て五節停止せられし
所薄雲女院崩依諒闇被傳(停)止也

本朝月令曰五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄尓之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天矚他人不見舉袖五變故謂之五節其歌曰　乎度綿度茂乎度綿左備須毛可良多万乎多茂度迩
テ妓慼乎度綿左備須茂
善相公異見内　一請減五節妓員事
右臣伏見朝家五節舞妓者大嘗會時五人即皆預叙位其後年々新嘗會時四人無預叙位之例由是至于大嘗會時權貴

之家競進其女究此妓尋常之年人皆辞遁可陶神事爰有新
御令諸公卿及女御輪（轉）追之其費甚多不能堪任伐案故実弘
仁兼和二代尤好内寵故通令諸家擇進此妓郎以為還納之
使也諸家僥倖天恩不顧于貴養賤破産以貢進方今聖朝修
其惟薄之其防閑此亦妓女舞畢帰家無豫燕寝然則此妓数
人遂有何用童案旧記昔者神女兼舞未必有定数四五人伏
望擇退家女子未嫁者二人置為五節妓其時眼月斟稍令饒
洛節日衣装未給公物若須節不嫁経十ヶ年者即預世叙位
聴令出嫁若願留侍者預之蔵人之列郎擇其替人亦前年
寛平遺誡曰毎年五節無人進出迫彼期日経営尤切今須公
卿之中令貢二人雖非其子必令求貢殿上一人選入召之当
代女御又貢一人公卿女御依次貢之終而復始以為常事須
入十月節召作名身在前令用意

按察大納言
左大將

秘
さし井為ちまて父なり給ひし
蔡上のえ宇し見ゟにきし

らへ乃をさちふをよしきよ今ハあやしれ乃え
公ゟ二人受領ゟ二人〻受領ゟハ上より出さ所以にして叔〻人のとハいつ
寄問殿上人のしわざあるとも人乃装束をちらとハ云し何よしと其ゟ申や
一説殿上人のしわざあるハ内裏よりたれて　五節ハ垣の年ハ公卿二
人殿上受領二人にて代ゟ始ハ公卿二人殿上受領二人五節にて
を受領のゟハ殿上人まてしわざとられハ上の女房にと云　女房に舞
服にて人まり若相公竟見云新嘗会時四人〻〻年依有新嘗
会若四人免公卿二人者按察大納言と左衛門督之殿上受
領は良清惟光也　以上四人也　私云良清今ハ左に守まて
左中弁なりしが宮内卿となりて左中弁ハ右大弁左守ハ
五位なれハ右中弁まてを守るとるといふへき女房
をなるハ受領ハかみゟを守まて左中弁なりとい絶
られて見えさ給のうく文にハ人を見く
寄問五節とをもに給ふ　例の事まや　一説花宮にはて御前
とあくしまられと　秘同にみしられとき
　当年ハ人の舞姫にしちて九女
とのまひ姫を惟光乃朝臣れはの給まて左京大夫ゟ葉ゟ給

むまこなとのいとなみしありき一すちなきさまなるをとかれ
箋 同 惟光母ハ源氏のめのとにて大弐か妻也 又乳母の子なる
一説 惟光ハ乳母子也 但源氏乳母ニ人あり 御めのとし
らいことに これ惟光か心也 未述也
大納言のかうなるむすめ 按察大納言のむすめ
御後とハ后腹といふて
あそんのいたはりさむすめを 秘 惟光ハ一すちもむすめとなり
きんきをいふか七こひ侍まて按察大納言か御後の宮子をは
御かたふ六ヶ月むすめとなりてまつりて
まとくおかしくハ文作へ座りてせさせ給ふ
花五 岩越叙位やうて文作ふ百留なる 花桐ひ宴ひみゆる
私 まとひてとハ御うハせなてその時文作せさせ給ふとて文章
まひあらりしかは 秘 兼て宝ふくよく御法せし
しつきあそは かいしたく人々といふ也
その日のいそきたまて 夕霧とていふ
まかなるをとはからみしかへ 白児 三ヶ月御し 帝をかしこそはからは

らつかさえきをおし御ハ七年をえてひまかさそ仏へ入給ハまうし
わかれつらか 両目とし
御前ふかうしてはらんせん 御前乃試を宮ノ見し
おおをなこせて 是ハ源の御あそてらちかうし
私 前のとハ御前と読し後とハおもへと思ふつき乃
今一説乃まてう 秘 一の給へのなりまえいまつる和乃作注
まもりてあしまうい うちハいつまとまあし御なみの給
御へきをとへひおもし礼まかしいふて
大かく見の云 秘 夕霧し 大宰か云と悲てくもり
とりいらて 御香し 若し痛し
私 御かともよりのぬとハ宰相ても せぬし
くすやあつく御すまし 大納乃国ことあるを入てまるかハさんとし
こちらハいしめてこう ゆふ霧
こ人乃はりうれそ 秘 宮上のはうさし
まうはんあらひ 秘 御母のまをさけあふなり
少蔵をしれへとなる御へし

いとあはれに　まふさばれ給ふ夢よりはとくさめ給へ

まい所　これ光むまり

秘　夕顔のそくし

秘　これ光むまこし

庭ごしよりみて

秘　ことに母が似たり

なりやましき事

ことにあらちとせは乃まきこ

かの人の所行て

ことに母ありても知て於ける　こまう

今ありしそひやられ

庭りたいかのことはつひ

なりふんであて　秘　ふんであてくわんひりくものなし

わが母のまれしよりおり所乃まへてことつふされ志らんとさ給ふか

豊受所とは五節の舞のうし袴の為の行しるまれしくめ

とされ光と称る也けるれは本綿のそくしいつそ

於りて合　こえつかはれをけかれあるはまれせさと所のかのしてこう

むせ　豊所は天照大神をいふ

秘　天照大神の御事より八大人の舞所をいふかの舞所の物をいふを衣のそと云也　守内

同延喜式神名帳廿一番豊若宮トアリ住吉ノ内ニアリ惟光今摂

律守也仍如此　祢名院しと　九禅抄青表紙にハとようけらいあ

とくのこ用く惟光ハ摂津守なるにてありしハ此若所ハ住吉ホ二所をとハ

まれぬ内此若所とや摂津なるか女所れハ住吉の為といへもしに

私光ハ祢名院に於お光てあうほし光八極二ル二世あらと行ある

とその志うしく神なるれわ光なれは連ふとよせて所し

こゝつこみのとれのゝ　秘川ニカ日はし

行万枌　しかるつ袖みちの　こゝつさむ夕ところせかつなりそ給そき

うら流きれけるる　秘　冬さ世みらるのかにてちつて年と

草子は光にきと　惟光の女れなり

わりとうして於ぬ光まてきされとも

夕顔とされともきこめて

なる母すゝうしこさに　此女乃れはして

きはうしそのそて　をきやしむしきそひくそ

さハこさはれうろくし　花ぞ光つるとめを住ニそとか心なしとよこ

行捧フク　文選

くちあしうて　夕顔の名なり

あさ紀乃名座まし　まちたと　六位の袍なり

五節にとりわきてさしもあやしきさまなれど色ゆるされて
河 殿上六位聴直衣也禁色也雖袍色宣旨色説被加職事色六
位職事着禁色故也　西宮抄云猪貴八王者以下與人所
用也昔時有制臣下不用近代五位以上昇殿六位皆用之ゝ
弄 六位禁色色　ゆるされて八韻のさかりし唯直衣ゆるさるゝ
一條御説ゝゝ
或夕霧六位にて直衣をゆるさるゝ八あの位の
事によりてさかりの色ゆるされてといへりにさぬのことく
ことぬのありさまのことくなりしといへる詞ゝ色をして詞ゝ又御説ゝ五
節ニハ六位にも直衣をゆるされくことさらに五節にて洩をそ許
秘 五節ノ日直衣をきたまふ
十一月十七日亥　丑時今夕五節参内　余勘宇治左府記仁平元年
東帯参入似無両目仍不参内ゝ師長未聴直衣色宣旨
ゝ聴色夕霧モ此次直衣ゝ聴とみえたり　業之五節之次五古直衣
みかはよりありしめなり　ことゝに直衣ゝ聴とみえたり　同日の日なりき
めもちのこゝろことにきこしめしけるとぞ　このとまと嫉まて夕霧をおもてとゝ
花 十一月中丑日舞姫参入或暁参則有帳台出御寅日御前試
卯日童女御覧辰日節会舞姫進舞
大とのゝ惟光大納言のは　摂津守の女と惟光か女とく
こしらう　巨文
河 昔も左右なきのしさいに　弄 大臣かまのはく
ゐのきよけに　又巨々大きやかなる也　広韻云巨大也
うるはしく海ことにて　其ゑ枕　何かゝも仕立てきなる也
これをこうさんとかひて　其ゑ枕
大との　源て二年内して見物　秘 上古八十二三　今年八そこさ
昔のめとゐり　秘 流ゝして此五節のまし　次才の御(書信
人は多く播まもなさ流々りてもみ宗にみなり(大式の女
河 乙女ハ少き女をいふ　万葉に未通女なとかけり未嫁女
といふり　乙女ハ天女のまし也女のあそひ　されハ万葉ハ嘉女とも
いふりし　じうしゝハ龍虎の五節色花女里ゆふふらん
あつ乃日くれつき　河 十一月中丑日より始乙若丑三日
まハ下ノ丑之但上ノ丑モ之例氏日以前は辰日ハ五節の節会
源 乙女子も神さひぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ逢ぬれは

をとめこも神さひぬらしハ乎てし此女房と云ひ出ていてう天
つ袖ふるきさハ人の命の世子か袖ふるとはらうりさをおほさ
ぞかしりおもしおもふ 是ハ源氏のおかことをよめりまてり
秘 筑紫乃五節のわか人へ法らうしおくる 我か身こそ此身をぬおもひし
ちり月の流りりをかそへてく 秘 かくこそへと見て此の語をいふ
此ふ只ハおもしき御かはりおもれハくいへりそれと五節も今に一段は甚し
切なると云ふなたち帆しと也 此段第子也にかなしてつもり
近衛言 けくいつもりに乃こらぬとそ此ゆる日影乃かつらの袖にかけしこと
花 りけていつもとハいひかれたるの名也 蘿かけ紙ひかきとよめり五節
此舞姫の日かけの糸をとつさしかさねて光にかけてある 又此舞の
袖にといへる哀れて日影みそへて
秘 そのかし源の在世をおもひしを祈らおもひて今はへまうて袖ふとけちとハ
源氏の五節にかよひしるなとこそひよ也
私此上文字そのうしろよきて作り御悲へていふ
其よりれくとよくとらりあへて　許 五節は日よれ出来るころ也
此度りの人へし辰乃日ハまさりたとき御ふうせてつもり

添 舞姫ノ装束也 寅日ハ赤色唐衣 卯日ハ青色唐衣 辰日ハ青摺唐衣
赤紐日蔭鬘等也 青摺ハ小忌衣也　源氏五節の舞姫のもとへ文つかはして辰
日のなかれし青摺の紙にて五節君のもとをさそふ
秘 辰乃日ハ青摺をこうと云ふなあかりにあひたるなり
河 青摺の紙とハあきこと蝋紙也 唐紙の文ハ下にあてて蝋にてすり
其れハいかて五節の料なれハ此紙の後りをふまへて用之也
おもしとう見えよし　其歌ハ先にしらせ
人出めと向け　若き歌は惟光か女は五節にいへと有之
宮人も志つ　河 こきやかなれ 又哭一無也
清らこき人出　夕霧は五所也　三井寺のみつさきつれて
天くやしおりてうつちもみてかくしぬなるへし
あそれもうれこさ紀のたくへ今のかけれは難波といひしところてぬ
秘 五節ハ内侍まて移と云て交にの守によせてちかん 許
無沙汰して彼所まてたちへし給ひつる事とそり 許
花 前所說帰京の時於難波之禊前宮退也之時於幸涂
彼禊也皆狎るとやとて解除也 五節の難波幸僧の禊之也之

いはまらへ侍り　五位蔵人等皆様ものなり何乃様も
何事とまで様のおけば　幸侍難波七瀬の禊あへしいまにいは
はしめ司まてこ兼的も延て便宜平兼的ハ五位ともて暁天退
おの時様の家上古ハ幸侍難波まで下向ハしられしを代ハ附
難とまて陰陽寮とあり仰ともとて勤仕し

七瀬所々　難波　農太　河俣　摂津 大嶋　橘小嶋

山城 佐久奈谷　幸侍近江

又洛中七瀬者　河合　一条　土御門　近衣　中
御門　大炊御門　二条末

應和三年七月廿一日御記云蔵人式部丞若原雅材供御禊
物以明日令天文博士保憲赴難波湖及七瀬三元河原揖

秘
みそきするもふらすにこふそく調ふ神のうけひくもまこしなり
同集云伊勢所詞よ難波ふもへ[illegible]侍りけるに
暁ふ森の侍りきるに郡とれゆらるとやるて
時ある祓らるくれ京つこさけて京のの祝て難波まらりれ
大納言もことはらふ　まとさらしん座すのおしてもあり　せんせ

養しててもらつ退出なり
たまへ着れそのの人なりぬると
寺守く女御門乃御前まり
それもとくめさせ
はののとハ内侍のまけいさるよ
さりやいとつ向しゆ
内侍ふと桃養あんとや
叫乃人を

秘　六条子にておつさ為し
秘　五位ふとあり給ふ也　寺同
惟光女を内侍ふてとて
常し　源の内侍なり
秘　夕霧し　家つくまん由をすてかいあくるこ
夕霧の方上を早下しぬる
ことしのすふまそ　気とこしかゝをさしまて乙子ハ可
乙子らし九名て任
秘　そきかなのうにちもとくとく
祈とてまさんふ叫て給をいて
うちそくとく
秘　みせ兼波乃花すし
せうとのとうハ度よ　夕霧の詞
五位ハいつゝ　まさせりとのとらいはる茂し
おとし私しそてハ
仍乃ゆとよろりし　又夕霧れも葉し

もしうつよふ　秘海ゝし　此ノ字ノ変也
河古人天ふ九ゝく　今案海也　日本紀ニ今ノ字ヲ以海
しとよおりそれを略してもりとよむ也　或ハ余也トモ書之
いそつはもはらん　秘定蓋之
さらにもえをうしとて　此壽して見つゝうる之
はまくものやうにいとは　秘のやうなるハ見えもいはしむ
志りのさとれのへとせ也
さぬかとよりハされてなり　惟光ゝ女なるのとて之
みとりのうもやり　古注の儀りよれ侍之
夕顔
日のきはもまるかりなりやし女子の行まの之神ふりきもしる也
ワり心りきゝ何とて之
字をあやのや文字ハ何をの字也也　私此字いさてゝ心得之也
河日のをとハ以蘿蔔為牟從諸社文字ニも日のをの草カワウ本歌とある也
あふ見思ひかれ　秘見ゆ之　同惟光女と童也之
ちゝぬ　秘惟光之　父之之
河之之世説云わりし此藏人まていもんかりとこいつ身かり伝心

よからぬまさしうりはて　此童をちゝ何之
たりそゝて　これ光の何なり
通わ紀之乃云　童の初之
なくもり明くうちあそにて　秘惟光かよひそこひあるし
きんちらハをあしとて而まてを　秘海也之　弁同
童夕顔と同也之　世説行れうつ等ニあり
ましつ云ふもえ次　五節ゝ母惟光ゝ妻也思ひもハしるし
これつ云ひちれ　惟光乃乳母りり夕顔なるよと母よりて
通れとさてと侍るふ　弁惟光源氏の乳をとりて
秘源の乳母をとりて　此夕顔といつるて紀也　私源の乳やと見ての惑
あり此入乃乃あり　惟光よりて思ひつゝ初之
これいそ紀あち　秘のやうふそいやと背そいちは侍る之
私云此義也以てうしやうふ此の御なるハ夕顔ふと于るせん
なくしいてと光と文つりあいそ紀あらつとれらうれと云之
紙人をみとうれこえやりあうは　ちをよりハ云云わ為めりし弁
秘云云わ為の人夕をうたつよのハさ見ゆく

私云此義ニ於テハ云々如何のゆへもあれさてもさしもはなれ侍れ
或抄又此書ニハ五首のあるよしをも見るニちかひたる歌の事
となりて皆いそきさまつしいひよくゆるしなられ夕顔
のやうにてひとくちの句ハ惟光の歌ときこえ侍るそ
まつ人の心いそき給ふて夕顔を住りきまれのまさる方
の文云如何ゆのしかりて思ふ又そこに立寄りなりと
いひてさて給ふまつ人しなき此後人とハ夕顔のうちなり
なら涌さうらかしこなり　光より云如何ゆのなし
はれたる人なく　秘　君如何ゆのなとおほし出るつけしと給ふ
二条の院をおもふくおほしめして
花　里ハ二条の院とのたまへ　なほ殿にありかの人さ二条の院東の院
又ハこれみしるひなめて　秘　夕顔と花ちる里にあるけ
給ふ事にておほく心あるへとなり　花同
大臣の此世おほくなしきたり
とおほしたつけのゝ源の詞　光より花ちる里へ夕顔
御心のまゝにのたまへるそ　ゆまてましてまへし
いたくあててかくみえたり

わのれなしこらきは　秘　夕顔の花ちる里とかのよはて
こころおかなかし　花ちる里のこころまたしれぬ
人をれのひたく　源を心をなかにはゝするとて夕顔の給ひ
はらこの人のほかこゝちと　云如何とにふたれ給ふのを
あはれなるとし
いつしれかり床かみ　花ちる里のむかしよりと夕顔の心に給ふ
まことむしひくみとひらかん　秘　夕顔の也哀里のると云ある
房の今かさめうなかはりうちにおもんとかんあるへく
むかし里のこちもちれぬと源のさうしむかしひあるにハ志あつねと云
ちる宿ゆかたくりの風うそれしつゝ　御心ハ惟光を云
河於人九　かんく御の浦のたもまゆゆかし　へかるんをとりくたしにあくぬかて
秘　木下の露てさいつり常ハ座いそくくなる事にいつり底かう
まこさまふいつもつくしくめなると
花　ちる宿ゆかそうを花のおれと九下のここ引きとりて　菓花物
河井九云　独りこゝ哀のさまかうなかれてうらの夕宿ゆかや
あらんいくへとおもろし　こゝ光ハ君まれ女のとのさるを事とへる

なにがしそれがしといひける　夕顔のむすめなりと云
いふかひなくいひしきこえてつかはし
大弐のめのとなれ　何事も思ひ出るに鏡山思ふ歎りやそらくし
あとにみまほしうちはらへにそあるけり　むかしはたのもしとはむ
家のあるじさのみふかきなさけにて此ことのこゝろはうすべし
秘　いまさらにかゝる此こまやかにまことに心ほしと
人をかうさちに紀のからくし　女のうき性のあるしき紙さまの心
さらぬ夕顔の心也
とかくよりまかれさはりまかるなとの也
おもし所もしきこえけり　花むらさき上のまとひと云
またそくなしこのえ　此段夕顔の心と葉玉の御身にてたる
えらるもおもく　さし御局はおもて世は夕顔一人世に比肩無之
なりても　六位のさしぬく　あるなく
流ゆくちなれるかけんの御心へまいるまじう
夕顔の詞よろしおもさくなるへし
なよそひのはてにゆくもかし
おもひやるはかないよしもの　大弐の詞也
年はのよりもんのとうまれのちし

まもあらはれたるといひかけてあらし　揚名の振ふし
かのいかめしく　字あらはなるへく
たゆこはさもさしきのの人あまた　大弐の心也
夕顔をいさめて　さまざまにとふにてもおり　秘大弐詞
なれつはし六位あなと人のならへり　夕顔詞
六位もくせといふしてありきなは　あるふかりとは何かに云ひのありし
御心へあるとも　来何もりのまこさまし　おのかふ
おなとしをたくし御さましつは　秘葵上をいふ
りの母もそぬそや　秘　源の蔵上のこれいつともはし
まゐれおまもかのつまりさまとよくあるる
御まをしつ　秘まことしこよく　弁日
さんりし此院まてのことん　弁むらさき上の御の事
むらさき上の似るこそのとは　源のおもふ人むらさきとく
まいる所こそなそれ小　秘むらさき上
夕顔り人はまいなかまかり
おやいまかくまかり　秘葵上なり

ゑをいとかうくにて　夕霧のくらゐのあさきを大宮の御心
小路のかたへまいれ蓋のとも思ふ所のこなたいとかうくかなしき
くにそと御心へをかしくれつきてさのしまて哀なりれと
大宮の詞に夕霧となく此それくものをかって
あおしれいは志うしあふりのし給へし　大宮詞
右摂政のこと
うさうあさきぬ衣をほしけりと　内大臣とは子ふ持の宮
世人もめくいかなれと　常の人よりあり波と世のうにかくし遣
うれしと母宮なれと人をさしとも何つぬか　此段夕霧は親と
うちこ給ふ大宮さそ内大臣へしうこ肯て夜ともりて
おひさきとの給ふ人さへ　大宮のうくつのひく相ふか身の
あら人をさそてとさうぬいまさ給のかおてもまり此夕霧は
なるへくおそ人振ものの見ゆかもに此本事と云はてあさきのを
はいうちにも大宮へはありきし　あかれは
秘　源氏の大殿大臣の事くは節会の時にはいかうちにおほせたまへ
但中右記本前会に記ありのかみのありし

寄一　勘源氏の大政大臣にて若君元服のおほせにつきて何をあさまなる
よしなきことをもきこしけるかいなし人乃まいらず
秘　忠仁公也唯三后者忠仁公始也あとさまなるを申されける事跡也
仁　光仁天皇宝亀六年正月七日天皇御揚梅安殿設宴於五位
已上既而内厩寮進青御馬兵部省進五位以上紫馬是青白馬之始（？）
忠仁公寛白馬交旧記所見未詳宗治関白以彼例覧之然者
勿論乞白馬着引諸院宮之故也忠仁公依蒙准三后宣旨被
覧之乞宇治関白同之依源氏大政大臣同就准三宮覧之者

執政准三宮例

忠仁公　貞観十三年四月十日為准三宮
昭宣公　元慶六年二月一日准三宮一如故支　仁和四年二月十九日更賜之依前国緑不変同年五月旨
貞信公　天慶二年二月一日准三宮一如貞観故支
諱不賜忠義公　貞元二年三月四日准三宮
東三条関白兼家公寛和二年六月廿二日摂政蒙准宮宣旨
寄　忠仁公例良房のとしの例にてあとさまなるを申さるる後代に其例と
用ゐるまでの良房公の時のるへ六百年ありしかれとかくしてみや

ゑしかふとり玉体乃為也　秋の節也　同或ハあをきをと
白馬と云ハ馬をさきにて白をひくゆへに白き馬をハあをく
見る為也　七日ハ衛舎をハ見て此衛舎をまうて云礼記文也見る也の節也
節会の日ハ門乃さしはさうてもろし此あり侍てほそうく
花　門乃儀式とちつをハあまるとかに在る窓に作下代する儀式と
ちつしるもなにやせうし此ありし侍て出てへあるより始これ
あさ此時の例にて御をへいつらし花の植といへるなり
二月(キサラギ)此廿余日(ハツカアマリ)朱雀院に行幸ありし
同 御記云延喜十八年二月廿六日己巳是日參入六条院ニ此
月被例之凡儀着天暦二年三月九日康保二年十月廿三日
両度例殊相叶之　此父子之時行幸上皇宮例
天長十一年正月二日仁明天皇幸淳和院　見国史
天慶十年正月四日村上天皇幸朱雀院但母后御同宿謂大
后十拍殿 見李部王記 其後度々幸此取抔亀山院御宇文永八
年五月行幸渡深草院御所長講堂之時有洪沈為中門下御
如朝覲行幸被追天長等例之

秘 仙洞へ乃行幸ハ毎年朝覲の行幸とて是ハ年の初の為し
是ハ此方よりまいり申を奉るといふことと也　他桃巻に年始と八今
此皇子にありてすへて此ありしを御覧しとも申なり　冷泉院ハ
朱雀院の御行幸とみえたる也とぞ
故に此の花月(キサラギ)　毎月之　扇をもし花月　音によむへし　弁同
或ハ花きさらぎとよめり　庚ニハ花月あるて花日ハうるをり
日本ニハ花月花日花木ふる也　吹花月又ハキクラツトニ
人ゝ皆花をよめる此らに也とさま又ハ赤衣の色ぞめて
きりたるとも少し気よりなりけれは赤衣をきたまへりまつる
同 保元内宴日有洪法法性寺関白被着赤色袍之由見松殿記
桜下襲 裏面ハ普通之裏ハ桜也ハ幡餝時祭日主上令着桜
下襲　同年辟給或又晴之行幸春公々着桜(椛)或萌木下襲染
装束也　晴儀諸臣着麹塵袍一日之當色之其時主上令着
赤色御袍給之又才一人同之　漢代暦曰大唐景雲三年壬子
正月五日内外武官各加階及天下老人五板授官年九十已
上老沭袍牙笏　西宮記云内宴之日臣下皆麹塵主服御

赤色ヲ一上卿服同色之袍是又例ノ有雖例之中故貞信公
並小野宮大臣度々著赤色但延喜之間国経大納言時々着
赤色ヲトクワウロゼントム云ハ地赤ク文黒袍也
苑　内宴日主上并一公ニ着赤色又殿上賭弓時如此見西宮
秘　抄青色之袍之下襲ハ櫻重或栢葉ヲ着用スル也
奇　青色ハ麹塵之同赤色トハカヤウノ賭ノ日ハ一ノ公ヲ主上下同色ヲ着ル
一説青色ハ麹塵ナリ呉ニ今モ極臈のきる袍ノ赤色ハおもて
少して深き青色よりハあをくの紅色ノ赤色は此色をいふへのこあをきし
いよく光そのりのと
御門と源と呉と取ちりのとく
ほもいもこさように
秘　朱雀院し
なるさらぬうへに
きみをその川ふ水に文人
うつしきよのなし
そのゆしこうかきこしある
秘　モミ三秘弄同点ス　秘きこうかし文とハ呉紀
学生とハ今日及才まへて学生とへとお次
秘　学生とハ今日及才まへさへとりて
奇　一説文人ハ信まて学生ハ今日及才まへさへと云其名つけるし
式部のつかさにこれ試とれきつへくれのふ大夫の太郎三人の
ちかのとらゆへさゆへなり
河　延喜四年七月九日御記云
去月廿三日式部省奏省試判文其判及才者三人登省
記云康保二年十月廿三日行幸朱雀院御題於蔵人所被行之
苑　苑葉共六舟軽　勒七言　證陵水輿詹及才人一人
擬作午　字好宣式部丞　排彈守是轉子　菅原雅材献策　奇後果
村上御間也是亦其例也
秘　勅題を出させ給ふし
秘　所常試ふ勅題を給ひてせさせ延喜應和康保亦之例し又搶河院覧
治四年為羽院御寺にて下勅題ありし士試
大夫のちかう一あつかる事なり
秘　おくりかり紀りのとて八　瘧病とりて
河水原抄云おくりかり紀りのとはいまこそ又かへし次の司の人へささ及いかるを
とりへるし奥ならし或云奥へ数ヲ極めて所に為しかれ不遂て動し
今案瘧病の為に惶なと云も甚しくなるとさしと云けまにし
まるせとてさくしぬへしと奥にあら次
みなぬ舟にのりて池にうかれて
む放嶋乃試ふいゆ給ひて

人に商量せらるゝもかたみになむさてハことにてあはれなるといふ
秘 放嶋の作文にて中将の人々もこゝろみに舟にのりて詩を作らせ給ふ
こゝろみらるゝ人々はなちて池に出て広韻をもちて題を給ふに人
をよろしきにはあらすしてなむ文を書せ給ふへし
河 放嶋試文也　朱雀院試に学生詩を作らせて中将にも
詩を作らせ給ふ　文章生試に式部省にて行ひて省の試と云也　今日
朱雀にてかく行ふ也　つねには式部省にて試の題給ひて
使みなをとこせられて題を出されて方略
宮たちみなまゐりぬへく
御かはらけたひたひなりて　夕霧也
秘 楽なとおもしろくてあそひぬへきものをとおほし給へし
春鶯囀まふほとに
院のみかともみさりられしと　花 院は御門は桐壺のみかと
秘 花宴には此院の御門と桐壺とおもひゐてたまへるなるへし　朱雀院也
なるへし　世にもあらぬ鶯のさへつりをおもひ出給へし

その世のことあはれなり　朱雀院のやうに侍らん御心はへて
桐壺の御門の御時のことを源のおもひ出給へるなり
ねとし給ひけりまゐりまふ　源 花たちは是は公卿一助
鶯のさへつるこゑハむかしにてむつれし花のかけそかはれる
秘 今日はわか身のうへそかはらねは昔ハ桐壺御門の御
かはらぬといへり　寿同
河後撰 鶯の鳴なる声ハ昔にて我身ひとつそあらすなりける
朱雀院 九重をかすみへたつるすみかにも春とつくる鶯のこゑ
秘 洞中をかすみへたつると今日は行幸にて春を得て知ると也
帥(ソチ)乃みこときこえし　秘 今は兵部卿にて
河 六条院乃弟也　いしむの宮まて秘風に兼人
今の上に御かはらけ　主上へなり　冷泉院也
いにしへを吹つたへたる笛竹にさへつる鳥の音さへかはらぬ
秘 世を祝し給ふて　さられあさやかに奏しなしたまへる
秘 庭竟より此楽を作人のゆへ御代を祝しまして
あさ庭に　秘 祝言なるゆへなりてし

主上也
とくせさせ給ふ　こゝに主上御覧じとゞこほりて給ひて
学びむしことにひろくさしつゝ春は桜花見るやよせさせ給
御製にも給せたる句さへ花ならんとて早くしめさせ　弁
を　主上の御製にも花の宴のよせさせ給へるは我御代のさかりを見えたまふ
これもこゝろふかくさせ給ふ　秘　第子也　主上は御前まで出御
なくちかくてふしぎなる所に召されたまへりしかは人々は詠せられし
といへり又の花おもしろかりけるはこゝろのなるへしとはいへる　弁
弁　文章生ふあまたのなかに人とこそ其さる所にかくいへる作文の詞
を両方ともかたらひてかくあるへきは花のうへに見えし文人ふ作ありて宴
比巴門の行幸して和歌の詞に花の御まへに侍ふ(?)
花おもしろき給へる

李部王記云天暦二年三月九日朱雀院行幸之　郷徳之間楽所頗
違絃音不分明詔右大臣云操絃者近候宮気右大臣奏之
上皇令召図書寮琵琶式部卿和琴余琴右衛門督比巴高明
親王和琴ア々箏兼明々又召唱歌者数人候菊欄
行幸の花宴上人あまたこゝろのなかにしてあそひて流されし桜人

河　安名尊　催馬楽　　桜人曰　あれなるはかのまことにてや
いふしへ二段　いへなるこそかはりぬかひせきにのこりし三段
あはれそふよしや人のさかりにさき　唱歌　右上人なり
唱　桜人母は源氏をなかにひかせたまひて　の御神に付たり
なにとかれなるとて　かし　こうした文句して
河　天暦二二九同行幸之日〻源昏主殿寮供庭燎之由見同記
おもしろき花の文　秘　朱雀院母后
すへき夜ふかくてのせさせ　私河海花宴皆人々是もその
河　栢梁殿在朱雀院良角東宮故老云彼宮有素栢房床也云〻此
故名栢殿為後宮御所之由見九条右丞相記
花　栢殿者漢武帝之栢梁殿になぞらへしにや　天慶十年正月朱雀院行幸謁太后于栢殿之由見李部王記
かくしてまいらせて　主上乃御依ふ源氏さかひのこゝに
后もちかよりてこゝにまかりて　太后御物語をも花院しかるに
けさのまひふかりり　太后ありて流す
古文をたかひにかく　主上乃御目ふ藤壺をまゐりて右

くるしきまゝに源氏乃大臣と　秘 主上の御心をかへりみ給ふ成へし
うしろめたく御心をたれにも
ありてもなかなかへうきまつひなき物をとや小蔵にたれ
まさるへしくおほすあまりて
今さらぬかくぬるよそひの
秘 后の御事
よろ川乃ことつゝましき御　世中しれるは今は后の御心をな
御覧じいまの御世まて中々言ひ出る事をかたく思ひて
させ給へことはりをさしも　秘 二条乃后ハ太政大臣相者の帝の妃
たゞし母さきへさせけり　秘 妃とハ須ての妃をいふ后へさせし
后ハなき御事はうちさきにさて　大后の御中にいふよりむ
むかしのまてを后の御心とはかりしける筆者の詞
世をたもちたまへてこ后あそくせハ　少 主上冷泉乃事を大后の御本よ
門徒乃人のおもひ　湖月抄　の事やうにとかり　出家とハいふ
たゝ后乃ことをさしひきたへ左源のたまかりし給とひろへし
いまもなき御事へさとかり　二条の后ハ歸る子ありし

后の御事にいたらせ給ふ世の御かきりまて時をみたてまつりつきか
ありけるに乃事にあれて御心のうちぬ時を
后にてさまさま年官年爵なとのあるしさまにてまの后の心に
なりぬる時今なりしてもむかし蔵人し世院の源氏の家へ
おほしめしけるをとりわき御かりし後悔あるしむつる　后の給年官年爵
發憤とありいとさきをとりとおこなひ
おいりてなからまろにさかはらて御まかりて
秘 きこひもしくおもへと　河 誠知老去風情少　見此争無一句詩　白氏
なにかひとへきる御心も　朱雀院なり
秘 此詞者風をことをもみ人への接婚より給ふしきんやや
私 何ともきこえくことそ何かひるわたりにあなゝあり
大かたは世のはかなうつろふ行をへてきすたすよひ
ぬらし侍りけるかしこきのをそえし世語のうへ行き
なりいとうたにこ人なんありけり
秘 此文を詩とうつくしよかなし御詞
秘 摸入 きう御字きなれハまさといへかへの代信をいへ

秀才と云へるこさき

奏
一説秀才をなすハいつまても士と云ふ必すしもれうちよりの

わらもいひ侍る也

河
礼記王制曰大楽正論造士之秀者以告于王而升諸司馬曰進

士　注云可進受爵禄者也　聖武天皇神亀年始進

士試帝王系図　進士及第例　養平六年春五星若連

珠詩（廿播藤原氏宗下）及第三人（三月廿日刻少輔藤原氏堂舒下）　孫王茂世王（桓武帝後中野親王男）

三原永通　文長河　登科記云式部以是忠親王二男進

士及才式膽三延喜十六年八月廿八日試（行事朱雀院御題云）

風秋詩（以鏡為白七言六句）及第四人（九月廿一日判）藤原高樹（字藤京童近江掾）大江維時

（字大江二）春開良規（二字朝）藤春房（二字藤云）已上四人不作開白及才

学ことなん　秘　夕立武中し

秋乃名きめしふそはつえて侍従になりと詠ひぬ

河
正躬　葛野親王男　弘仁七年補文章生天長八年十一月二日任源

清平（是忠親王男也）延喜二年九月文章生七年九月廿日侍従

源保光（代明親王男）天暦四年十二月廿日挙文章生試同五年遷

及才十年正月一日侍従

同
延喜源光之例可尋之　秘　秋乃京官除目ニ少将任侍従也

かの人思ひ出て　秘　己しかかる事　花同

松しはちちふ　秘　内大臣し

太上のよりかかる御ゆひを　源氏六条院を作らるるを

ときいてし

これこそおほつかなき山住の人　明石上をいふなるへし

六条京極わたりに中宮の御ふるき宮のほとりを四町をしめて

異
六条宮乃跡なるへき元中宮のおほえ宮をもとゝ

も
中宮の御ふるきさとは六条御息所乃住かなり　前坊の家を六条院

地は方八町乃中に作り入られける也

秘
京極東乃旧跡し　かくりてハ六条京極四町つゝ取られ

かくれは四町をとこもるへし　二町は方なるへし

河
うつほの物語云紀伊国むろの郡に神なひのたね松と云長者

吹上乃浜のわたりに方八町にて内に紫檀蘇芳黒柿

ところともしてつゝそれを　金銀瑠璃車渠馬脳大

度を経りかさねて東乃陳の戸ふそ長の山貴の陳の戸ふ八菱
はけ西乃陳戸ふを秋乃林小こ八松の林に而をめくりしてる
本箋して此をうこせんはると横ほうれたね松の陳の深氏
此宮乃歩とゆふなりて陌西八町はに季をかて行在々りといふ
秘 案上此心みなく　古伝うう
武部 以文
御賀此とをいのうへとまりまうらる香　父式アに在此年生
此賀を案上周甚しめて
身此賀乃る一動賀ノ義ノ親不同し法皇ヘ八薬師經其の令經ホ供養度 アリ
松とくをまたるらしつる紀　身ち続さりあるた本なれ能るとを
めつしつん此家　六条院比経りおして此賀をまへこさとし
そしみそて八　秘 源ホ以文し　身円
此はいそ紀のり　見は松六条院比りらくるりあるへし
御とし之此て　此此賀は此るし年此時の之間を賀まする在
後性大寺たたト記云試楽とこと　不審
花 蒙求上巻とて此詞アリ　御賀之 年滿し　三代実録第ホ以
元慶二年九月廿五日丁巳大上天皇延局碩学高僧五十人於
清和院大設ヶ無會講法花經限三日説太皇太皇今年始滿五
十宝算由是度賀復善祈移餘黎親王公卿文武百官畢會
此御賀之ヿ监觞也、可尋
身 うしこ八年ほなるへし　賀けるたるはるるしとこ経　此賀けるりるしとこ経
年丘此義不用之　同書 年満し
此ふふいまつく　源の此見ふ入まえるて
へんそいそく深　秘 案上之　純仏比るれ日乃紫未録とみえると
こんし此陳ふもつけて　秘 花義里坐案上此中とうれるといふ
此あつしうひまして　守源と花義宴の中此れるとこ
御をふ宴上て花らう宴とのるし
年此世中に在いまう〇こと此名　御賀此いなし跡男之ことまうへ
て式アにまふ比りいたつもと源の世中へそあまねく仁恕ある人今
式アにまへそあまらしとそ
よに細をそてありしくあけ此光　秘 源氏式アにまをとこうしよううね
此中くし八案上乃るらひなる紀影ふこふ三此てよ後をつるらめ
せし此代　者円

つくしはかりひとゝきまみえをあそ　けう次第此比つろひの時
御書信乃事りしるまのしとさひ出くさなう時なるれとき
くわまとわらしほとらひきくるへくまかりる中にとらわかる
源のわきとの中に紫上ともに名にくりてあつまつかる世の人も
おもしろひさこそかまるを御しく式部卿にれをまをとし
まゝ家まてあかひこそとて　式部卿宮へそうしてとおりはれ
紫上にはいくとまかるかいかしと也されしとみ思ひてまるをかいへり　ハ
めいわくにお思をにえうくはせり　御まへ渡まて
紫上の給せしれまふハうりも便なふをはまにはまうこはは呪なるしハ
意境此光花かりと依あって式部卿宮の御なり
わか乃こハ心ゆかれ　紫乃継母としかるまふ式部卿の依代給ハ御合
世源乃御まうらひれおかし　秘王女御立后の事にさ継子の御さまをまかる
乏ひしき御ふなうたましとハわか方の御心ゆかぬるとおわして先御乞を
八月よ秋六条院作りたてゝいてうり給ふ
此六条院河原院を模せらる清純乃てうち一世の源氏作れかるまるに
例あかつるるん　延喜十七年三月十七日己丑此日参入六条

院此院是故左大臣源融朝臣宅也　大納言源湛朝臣奉進故院
延長二年正月廿六日己丑此日参入六条院今御此院
ひたしさ給れまうちハ中宮の御かた　好文
六条御息所乃旧跡と也此秋好乃御方　六条院の坤の町則
今川これ五度り　巽にハ源の住まふるとし
うちうハうんうし此院よ住まひり　秘花ちる里と
いぬ井乃まちハあかし此院とこ　乾ハ明石と
ふんあさ所なるとハ　りとうら此地山まて住りあらくなさの
なるをハ作りくて給なり
ふるうんうんうしハ　ち川とに源のわたり給ひことあは紫上と
此所にあれひたとしまふへの春の季を作りましにそ春れおもへき
よりか乃山まて若葉乃　中宮息所れおもひし給ひ時の心なるへし
ほりそ乃音をまるへき　ほつし作りくへあかし
その木にふ給ひく　六条院乃旧跡り八月よれハ秋好中宮方御よ
あひみかけし
さ代大井乃まつうり此睦山ちかくに　住所大井之部みを

こゝ些山とハいへりむしくハ無法に又無始也
小乃ふんり　しらこのむちの皇后の十方世界の法にかくといへり
くるれ　牡丹ノ類なと　季 若丹に牡丹共云其花紅也あまり
同 黒蘭に 膽とも云草アリ同物に 薔薇花なといへり
少若丹 牡丹とも云説アリ 是ハ各別にとなと
ふんりしおりてハまけらく　しゃう此町の東南ハ天満ふ候
あふて 鏡のる此島に
六月此御樓上台(アツヒトコロ)
上る(ヒラウメ)とも　無上ナるに　花司　同 馬場殿埒 五月一ヨリ月十六日 其ノ方ニヨリ備フ
一説云に夜乃方合ツトニ云に夜とも有甲夜首に夜又寝夜ナヨルノトトモ云也
今案に夜不一説此はふ寝夜を枕のにも座といへりし夜ふ何さる説
云夜乃字訓をおもしと云なし人をもち民ふあらされはと云なれと
なといふなり夜ノ字の訓し
みしれもちちまことおりて流こさまけてとく町し
いぬ井乃町此おり面を明石の院のよ冬のかたちはなとふかとつ或
ふて法なる町ふしくまりかふへし
これハいかなるたてそれ東　あしれ上る中宮の法母なりけれと
秘 母なりもあらりたらりおりし給くもあり
ひかん乃比ゆへ　六条院への彼岸のほとなり
同 彼岸(ヒガン)荷(ヵ)法蔵道経云一切衆生依時二八月斎十方世界一切
衆生離苦得楽霊瑞而已
彼岸者二八月妻令時修到彼岸斎食とく　秘ニ時正者ふかき紀日にあり
一くひふとと　此かとく夜ふ梅法ゆへしもかかしさハり給そて
中宮ハ深御延川に
おいろゆるまし　こさたの宮ぬもちゐまし　これのひとつ正とともちゐまし
とたうこうりのまなり
をれはたつくひとこの比りゆへゆゑ　時くにあやめのもたへ
うれつくろりもてみるとし
法車十六(ジウゴ)御おのまふ位かちも
秘 六位をよくふとこし　花式部卿とれはうろひし　花司
こちふあさきかとれて　源氏乃法とうろハなれいとくしこさ程
此とれいあしれとなり

世乃そしりをもやとしてふさきの人〈主ハ何ゆゑ〉もをとろへしといふ人あり　なし
河　肴カヘリミル〈　肴略也　源の清くしるしふんし　むちる里と　花ちる里をも
いまひとつこれ併宗りしミる
秘　そひとつひとつあひあるあり
たいくおろし給なそ　むろさ紀忠れまとうにさへのしちにねし
御法乃君をひく　秘　女房し花ちる里に住まいまうて
それなしりくりし法さ給へし　をちる里と紫ふさきのした
とさぬ所ふふとは必もちし給ふもしこさとなれ御法宮
〈乃ふきさん忠のふうつくしそもてへとハ御法里をとて
しつさ給ふうへ〉むりれてとし也
女房乃御心よりつもりて、はへし官をそ
河　究そ　細分　女房のつけのなさしそれはあてしま給ふつる也
九六日そく中文　秋好乃六条院へまうり給ふ
さハいへと御世し　秘　紫上ハ北そうりとなくいまくさし
ふさんハ御一院とゑしくなりし
私　此歌ハ紫上の此そうりも肴略志のまてみえし

肴略志のまてし中宮そらとられハ事もそうしてけるしも云所ん
御さいかうを人れなり　とより秋好中宮ハ御ゆるとく
御寺ふうちにひく世れまりしとなしそれなりし
らしおもとそうしゆきさうちり　あるさこかそ人の廊おもしすあ
まちうしなりしこさ　廊おとひつくなりひふかようふなりし
れをとまちうこさ他しいてん
またとまへもいそん　秋好中宮乃おまへ
これなふなすらせ　をも紫上乃此そうへ中宮よりなりま〈ゆゑ
むてん河こ発そゑ　そうの乃家ゆゑし　秘　紫上これ此そうし
河　紫苑色　西蘋芳裏青し
寿りさことハ上ふ忠乃御こそハさゑふ必もそうみも　紫苑色ハさゑ吹る
一節あうくち葉ハ尋常のうち葉のあうくれにうりくねら也
事これおし給をなんえおりし　これてさうりもをる
秘　紫乃色し　同　花のるとも上系乃他のすとおけるを
業花物語云いかに人への后ハそうハつういせまかさうりをそんかん今これ
世をにこのしまてさ御くれつのせのふかさこしハかりませかひく

らへの人のあたこさ須寛ハ上東門院の御かさし
秋好中宮
作る雨りさうつひ　此寛枢稱給へ(さと)中宮ふ侍かう(てと)
色うら春待苑ハよろやとれりみちと思はつくにうふ君よ
秘
心うら春ふ色を志る御かる紅葉乃雪白こさを此読せよかし　前同
風乃作てあうれんあへさりとてハとり詠しと云色あ下
まうしさへて　思ふのかの人へし

西さと
風ふちる紅葉そうなし　春風なといへる御ふかきてこそこゝめ
秘
紅葉ハ色よりもゐさし岩根の松は春の青みしにまさされし護
御し祢う夜もれふるかへてかて早下せましてわかぬ　前同
私　河にいへる松よのそふうきてそこらめしゝ文詞にれいつゝへの松よき
河
いへるの松み葉は春し万葉にゝえなゝぬハへあかしぬし君せい
さぬなとりふ色し作らりうくハ造花の風情し　或本に岩根の松
ふ作きてしそこらめしゝ詞ふある因ある　拾遺云元良親王
梅香殿のとしこにいまた杖いつまうまさかし同侍りけれハ秋も
おゝしう侍りしと云けれハとり詠さ桜をこれハいひてといひて侍りけれハ

大かたの秋くれは色ならぬしかと花かんか時そいつまてとかあ
伊尹かこと七月日
宰相中将忠雄春秋志へのかうて春をのこより
詠さ御しのうつくいふうひなうくゆりし此さあふいひあう給ひと
て桃園家にれかうよ色と中の十日なるうれ御とにより　詠さ
むとてとおてまてさまそてかふへなりるかいとひかくしとかうあへ
御ふ帰り花にしおりし詠さうをいとなれ侍まし八とて待ちお
へましハもふにかとつくる君へかうて色しなまれハ松よ作て春の作方へ
うかの秋を二君ふまうせて君へかうて此けさ春を給そふまし
色し
作てもて人へ思へんて此よう此御春とあり世は春をともて侍
或御説云下の心ハ早下し風よ散り紅葉ふとて将くより
ろさあなるを此岩の松いハうへてある紅葉ふをとよりくる心
より色くうへりいうてうこ紀ふり御此るをおしくさまんへとし
しとりあへつきて　思ひのかゝやそことひよりのよへと中宮此
感しとうれとなり
作前なる御人へく　中宮此をきまへなり

なくしはのみちのはをそれこ　源の助よしはふく
春のむさうに　秘　胡蝶巻の帝ふたきおほえ
あけぼのあけりん而　たゝ中宮を龍田姫にたとへてまへ　身のこと閑
河しきそらく　河退なり
ひとつやうな　源の帝さるなり
はしたりの風うちの帝を君ひまてこそてうしあり
秘　かとてそらん八町八丁　のちしてのくいひかりします
同しくて同じ　あるまし
大内のはうこ　あかしはよきなり
帝きつらひとへしめしておこころえさるなるとあり
これも北条の西みなみとまゐりし十月まつりあり